

「授業の映像化」の論理と構造の解析（Ⅱ） — 林竹二の授業の映画化をめぐる —

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2023-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三木, 博 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0002000052

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



「授業の映像化」の論理と構造の解析（Ⅱ）

— 林竹二の授業の映画化をめぐる —

The Analysis of the Logic and Structure of Lesson Visualization (II):

On the Filmmaking of Takeji Hayashi's Lessons

Hiroshi Miki 三木 博

集中が深まれば、子どもたちは黙ってしまいます。
軽い発言が飛びかっている状態の中には、こんな集中はありません。
ほんとうに集中すれば、ことばがなくなるのは当然ですね。
これは、ほんとうに「追いつめられた」姿です。

林竹二『問いつづけて—教育とは何だろうか』¹

はじめに

第一章 授業の写真と映像

第二章 二人の人物（一）— 一校長・安里盛市

第三章 二人の人物（二）— 演出家・竹内敏晴

第四章 撮影者の視点—グループ現代

おわりに

【林竹二・関連略年譜】

はじめに

授業の映像化の本質と課題に迫ろうと試みる本稿での主題は、教育学者・林竹二による訪問授業の映像化の分析にある。その映像化の経緯に纏わる事項に焦点を絞りながら、順次考察を進めてみる。

林による訪問授業を映像化しようとする試みは、1977年と翌78年の両年に渡って沖縄の地で、自主的な記録映画製作者の集団であるグループ現代によって実現されている。林竹二は宮城教育大学学長時代（1969～75）から授業巡礼と称して、全国各地の小学校での訪問授業を繰り返し行っていた。この沖縄への訪問授業もまた、その授業巡礼の旅の一環である。林は1975年から1983年にかけて実に全八回（五回目の訪問以降は、実践授業ではなく教育講演会など）もの沖縄訪問を繰り返し、那覇

市の久茂地小学校での訪問授業を繰り返している。

林による沖縄での訪問授業の映画撮影という出来事について、本稿ではまず考察のための端緒として、そもそも沖縄の地で林の訪問授業がなされたこと、その訪問授業が実現するに到る経緯について、その詳細を考察してみる。

ただし、あくまで考察の論点は授業の映像化に纏わる問題であり、この論点に深く関わってくる人物として、まず写真家の小野成視を取り上げる。小野は1975年1月の永田町小学校での授業に参加して以来、林の全国の小学校に及ぶ授業巡礼の旅に足繁く随行取材したカメラマンである。小野が記録した数多くの強烈な印象を残す授業の写真映像について、まず考察の俎上に載せてみる。

次いで林による沖縄での訪問授業の実現に直接に関わった人物として、当時の那覇市立久茂地小学校校長であった安里盛市に言及しておく。いわばこの人物なしには、そもそも林の沖縄での訪問授業はあり得なかったのである。

もう一人、沖縄での映画撮影に到る経緯のなかで欠くことのできない人物として、竹内敏晴がいる。竹内は新劇の演出家であり、また独自の身体知に基づいた「からだことばのレッスン」などを通して著名な人物である。実は竹内と林とはすでに1962年以來の知己の間柄でもあり、同時に沖縄での映画撮影を担当したグループ現代のメンバーとも深く関わっている。沖縄での映画撮影でも、林に同行したこの人物による証言の数々は、本稿にとっては欠かせないものとなっている。

そして最後に映画製作者として、グループ現代について言及してみる。この映像記録者という製作者側からの独自の視点が、授業の映像化について考察を深めていくには不可欠なものとなる。とりわけ「記録・授業—人間について」の監督・四宮鉄男が残した授業の映像化に纏

わる文書は、授業の映像化問題の本質を浮き彫りにしている点で大変貴重なドキュメントとなりえている。

以上、複合的な視点・人物を絡めながら、林竹二の沖縄での訪問授業の映像記録について、映像論の視点から考察を順次深めていきたい。

第一章 授業の写真と映像

カメラマン・小野成視

林竹二は1969年6月、63歳時に東北大学教育学部教授と兼任ではあるが、先に東北大学教育学部から分離独立した宮城教育大学の第三代学長に就任する。その翌年1970年3月に東北大学を退官した後、10月22日に宮城教育大学附属小学校6年1組の教室で「開国」の授業を始めて行なった。この授業がその後、1985年に78歳で逝去するまでに、全国の小学校などで行なうことになる三百回以上に及ぶ遠大な授業巡礼の嚆矢となった²。老中阿部正弘(1819～57)を中心とする幕末日本の開国情勢を素材とするこの授業と並んで林の代表的な授業とされる「人間について」は、その「開国」の最初の授業から四か月後の翌年1971年2月19日に福島県郡山市の白岩小学校6年生の教室で、初めて行なわれている。

因みに授業「人間について」は、当時宮城教育大学で開講されていた総合コースの主題であり、また授業「開国」は、林がかつて東北大学で数年間の間、集中的に取り組んできた日本思想史研究上の主題でもある³。林の訪問授業を代表する両者の授業の主題が、そもそも大学での講義を下敷きにしてなされていることには留意されておいてよい。



図1-1 林竹二 大学研究室にて
欧米での幕末海外留学生の事蹟調査
から帰国直後 撮影：日向康(1963
年 秋)

本稿では林竹二の沖縄での授業の記録映画に焦点を当てながら、その映像分析を試みる。ただし記録映画の映像表現を取り上げる前に、まず沖縄での訪問授業以前から、日本各地で行なわれる林の授業巡礼に随時同行しながら、つぶさに授業の記録映像を写し続けた写真家である小野^{しげみ}成視(1945～)にここで言及しておきたい。

小野は異色の日本画家である小野具定を父として生まれ、日本大学芸術学部写真学科卒業後、雑誌カメラマン、国際情報社写真部などを経て、ドキュメンタリー映像を撮り続けた報道写真家である。

まず写真家小野が、初めて林竹二の授業に参加した当日(1975年1月13日)の述懐をみてみよう。

国立大学の学長が、小学校で授業をするという。それをある教育雑誌で特集するために、撮影を依頼された。それが、私にとっては運命的な林竹二先生との出会いであった。その授業は、私が想像していたものとまるでちがっていた。初めて受けた授業「開国」の二時間の衝撃は大きかった。シャッターを押していたという記憶がまったくないほど、二時間がアツという間に終わってしまった。・・・授業というものは楽しくて、こんなに短く感じるものなんだということ、二九歳になって初めて知ったのだった⁴。

こうした小野の鮮烈な授業体験の述懐は、その後沖縄で林竹二の授業を映画撮影したグループ現代の撮影スタッフが林の授業を直接体験するなかで漏らした口吻ともどこか共通している。グループ現代の監督四宮鉄男は撮影スタッフの視点から、そのときの撮影現場を支配した特殊な雰囲気を生々しく伝えている。

撮影が終わったとき、カメラマンたちはくたくたに疲れていた。立っているのがやっというほどであった。カメラマンたちは全てのエネルギーを使い切って、林先生の授業を受けてしまったのである。・・・「撮影が終わってから、魂の吸取り口はカメラの前方だけにあるのではなくて、撮影者が覗いているファインダーも、実はそうなのではないか、としきりに気になっています(中島彰亮)」(太字 筆者)⁵。

小野の述懐に戻って、続けて耳を傾けよう。

一九七五年一月一三日の「開国」の授業と出会うことによって、私は、林先生の授業の中で、子どもたちが日常の生活では決して見せることのない深く

集中した美しい表情をあらわすのを見た。専属カメラマンとして林先生の授業巡礼に同行し、ほぼ十年間、先生の授業の記録を撮影した。

この1975年1月13日の授業「開国」とは、林自身による授業記録の年譜によると、千代田区立永田町小学校六年一組（谷口学級）での授業のことである。その自記録の年譜には、「小野（成視）君これより参加」と追記されている⁶。同年（1975年）の2月19日には、当時の文部大臣永井道雄（三木武夫内閣）による永田町小学校3年2組での林竹二の授業の視察が行なわれている。この視察の折の授業風景の写真も写真集『林竹二・授業の中の子どもたち』に数枚、掲載されている。それは「四十人を越す報道関係者が教室内外にひしめき合い、TVカメラが音をたてて回ったり、写真のフラッシュがたかれる」といったおよそ小学校の教室風景には似つかわしくない騒然とした状況であった⁷。

永田町小学校の教室での子どもたちの様子は、授業の初めこそ、カメラの派手なシャッター音をしきりに気にしていたようだが、一〇分ほど過ぎるうちに授業へと没入していく。子どもたちは「撮られるのに慣れたのではなくて、林先生の話に引き込まれ、カメラを意識している余裕がなくなってしまう」⁸のであろう。授業を自ら体験する以前には、もともと「カメラのシャッターの音でだめになるようなら、たいした授業ではない」とうそぶいていた小野カメラマンを尻目に、授業はたちまち集中と深度の度合を加えていく⁹。当日、授業に参加していた「教授学研究の会」の松本陽一は「教室でバズーカ砲のような望遠レンズを構えている^{小野}氏の姿は少しも違和感がなくなり、子どもたちも写されていることを気にしなくなりました」とも想起している。

写真家小野成視が、東京で初めて林竹二の授業を直接体験した四か月後の1975年5月に、林による初めての沖縄訪問、那覇市立久茂地小学校での授業が行なわれる。その後1983年まで、林の沖縄訪問は、確認される限りでは都合八回に渡って実行されることになる。その沖縄訪問の第三回目（1977年）及び第四回目（1978年）において、グループ現代による授業の映画撮影がなされている。撮影の舞台となった久茂地小学校の教室では「異形の男たちが異様な機械を持ちこみ、奇妙な格好で仕事をする」¹⁰といった珍事に対してもあまり妨げられず、子どもたちは徐々に授業に没入していく様子が克明に記録されている。

これとはやや文脈を異にするのだが、かつて羽仁進が新進気鋭の映画監督として『教室の子どもたち』（1954年）

を撮影するために、東京下町の小学校に撮影スタッフとともにいきなり教室に闖入した際の述懐も想い起されて興味深い。そこで子供たちは、数日の間はこうした珍事に対して物珍しがっていたが、すぐに事態に馴れてしまっ、急速に警戒心や興味を失っていく様子が記述されている。隠しカメラの術策はもとより必要ではなかったのである。こうした記述に接すると、おしなべて子どもたちの順応力の高さには、改めて驚かされるものがある。

さて写真家小野成視は、この永田町小学校での授業体験以降、いわば林竹二の専属カメラマンとして、全国の小学校を舞台とする林の授業巡礼の旅に随行していくことになる。いわゆる「ドサ回りよりひどい旅（小野）」の始まりである。林は久茂地小学校校長の安里盛市宛の書簡（1976年3月8日）のなかで、小野について「カメラマンの仕事は誠に報われない仕事で、しかも、私の授業をうつつ自由を確保するため、就職口を断って、ひどく苦しい立場を強いられている」とも同情的に述べている¹¹。

小野の実父である日本画家の小野具定（1914～2000）は、白と黒の基調に基づきながら、そのコントラストをきわめて強調した特異な図像表現で、原風景的な強烈な印象を画壇にもたらした[図1-3]。その実子である小野成視による教室の子どもたちのモノクロ写真でも、その映像表現の特徴は光線の輝きと闇の深さとの対比が際立って強調され、その白と黒の色調の交叉から生まれる印象は鮮烈である。林による小野成視評を見てみよう。

小野君は、名のある日本画家の息子で、若いときから、お父さんと一緒にスケッチに行ったり、写真を撮ったりしていますが、いくら写しても、「親父のスケッチにはかなわない。親父のスケッチのほうが、ずっと生きて、正確にとらえている」と言っています。そういうお父さんの影響もあって、非常に物を見る眼が養われているのだらうと思います¹²。

こうした小野独自の撮影技法のもとで撮られた数々の「林竹二の授業」の写真は当時、狭い教育界を越えて数多くの雑誌をグラビアとして飾り、1980年代の林竹二ブームともなってその授業が広く社会に喧伝される要因となりえた。



図1-2 日本女子大学附属豊明小学校
三年 撮影：小野成視（1975年）



図1-3 小野具定「冬ざれ」（1980年）

感想と写真

林竹二は常々、1970年代当時の学校教育における授業一般が一定の事柄を教える事務に矮小化してしまっている状況にあって、自身が行なう授業の本質について、それは「**子どもの内に何事かを惹き起こす営み**」であり、「それによって子どもが変わることが、授業の課題」であり、従って授業は「**一つのカタルシス（浄め）**」でなければならない¹³と繰り返して訴えてきた。林はソクラテスから学んだ魂の善導法に基づいて臆見に汚染された子どもたちの知のあり方の本質転換を授業で敢行しようと試みる。

学習が一少し大げさなことばを使えば、自分を賭けた学習がおこなわれているかどうかなのです。ことばをかえていえば、答えの「根」にあるものが問われているのです¹⁴。

ここでもうひとつ、林の重要な授業観を提示しておこう。

授業というものは、子どもたちが、自分たちだけでは到達できない高みにまで、自分の手や足を使って、よじ登っていくのを助ける仕事だといえるでしょう。本当に子どもたちが自分たちだけでは到達できないところまで自分の手足を使ってよじ登っていかなければ授業ではない¹⁵。

授業によってもたらされるドクサからの脱却と新たな知の可能性、それによってもたらされる子どもたちの変容こそが、本来の授業の究極課題とされている。ソクラテス流の対話法によれば、「相手が自分の意見の前提ないし基盤としている常識を確かめる。その上でそれが果たして正しいかどうかを問答しつつ吟味してゆく。次第に、今まで疑うことさえしなかった常識がいかに曖昧で根拠がないかが暴露されてゆく。相手は決定的に自分が無知であることを思い知らされる」¹⁶といった論理の経緯を辿ることになる。

だがはたしていったい誰が、どのようにして、子どもたちの知の転換・変容について、そもそも明確な判断を下せるのであろうか。

そこで授業者である林がしばしばその物的証拠として提示するのが、授業中の子どもたちの表情を捉えた「写真」であり、授業後の子どもたちの「感想」なのである。林は小野が撮影した写真について、たとえば次のように述べている。

小野君は開国の授業の中の、山角君の表情の変化を追求して、これを見事に「うつし止め」てくれた。・・・小野君のカメラは、子どもの内面で進行しているドラマを見事に捉えている。それは、はげしい「経験」である。これだから子どもは授業を通じて変ってゆくのではないか¹⁷。

久茂地小学校の古謝君の写真は、授業の中の深い学習が、自分自身とのはげしい格闘であることをまざまざと示してくれた。このような、はげしい「経験」なしには、子どもが、ドクサ（もち合わせの、卑俗な意見）から解放され自由になるという「出来事」は、生起するはずはないのである¹⁸。

なるほど小野カメラマンが撮影した数々の子どもたちの写真を眺めると、それは映像として授業における出来事を正に目撃し、フィルム上に固着させるきわめて迫真的なものであり、それら活写の魅力に抗うことは容易ではない。だがしかし、それでも先ほど触れた素朴な疑念

が生じてくる。はたして小野の写真は、林が主張しているような授業の内的ドラマを写し撮っているのだろうか。小野が写し撮った写真のなかの子どもたちの表情は、はたして林が主張しているような授業の真理性に対する「新たに強力な物的証拠」なのであろうか。

小野の数々の写真がもたらす視覚的映像表現としての迫真性を十分に認めながらも、はたしてそれらが林の強調しているような授業における教育的カタルシス（＝魂の浄化）の物的証拠であるのかどうかなどについては、早急な判断を保留せざるをえない。写真のなかの子どもたちの表情から、はたして授業について何かしら断定的なことが引き出せるのか。愚見によれば、そうだと、そうでないとも、何とも言うことができない。はっきりと断定できる根拠が見つからないのである。

宮城教育大学学長時代の林竹二を身近でよく知る教育学者の横須賀薫は、林が授業を考察するうえで、何よりも重視している子どもたちの感想の読解について、率直に述べている。氏は子どもの作文を「教育学者の中では、いちばんに近いくらい読んでいます」と自ら述べるほど、子どもの文章の読解力について自負している人物である。ところが林が口をきわめて賞賛している子どもたちの生の文章を、林のように決して読めなかった。「私にはその感想文がさっぱり面白くもなんともないのである。そこから子どもへの想像力がさっぱり働いてこないのである」。ところがそれらの感想をいったん林による授業の解説のなかに置いて読んでみると、「子どもの内側で動いているものが実によく出ているではないか」。横須賀はこのことを、たんに読解力の高低の問題などでないとして「私には謎である」¹⁹としている。

横須賀は続けて写真の読解についてもやはり同様に、林の解説抜きでは子どもの表情の意味を読みとれないことを率直に吐露している。こうした横須賀の見解を、たんに個人的なバイアスのかかったものと呼べようか。子どもの感想や写真を林による解説のなかに置いてみることで、つまり実際の授業のコンテキストに深く照合せながら読み解いていけば、その真意は自ずとわかるのだろうか。あるいは眼光紙背に徹するほどの卓越した読解力を備えた授業者であり、「行間が読める人」²⁰である林ならばこそ、そこまで読み込めるものであろうか。

あるいはこれとはまた逆の場合もありえる。教育関係者ではないが、林竹二の授業に触れた一人の医療関係者から、次のように報告されている。臨床医の塙正男は、林の授業を受けている子どもたちの写真を初めて目にして驚く。「非常に衝撃的でした。そこで、その授業の記録を読んでみたところ、字面を読んでみただけでは、どこが素晴らしいのかさっぱり分からない。このギャップに再

びビックリ、本当に驚いてしまった」²¹と。

このような捻じれた事態を、はたしてどのように理解したらよいのだろうか。

こうした問題を再考するうえでの手がかりとして、ここで迂遠ながらも林竹二と斎藤喜博によるある対話（1975年）について触れておこう。それは対話集『子どもの事実—教育の意味—』所収の一篇である。その対話の最後には「教育に作品はあるか」という古典的な論点をめぐってやりとりがなされていた。そこで斎藤は、普通の意味では教育には作品といえるものはないと断ったうえで、次のように述べていた。

教師は専門家として、しかも芸術や科学とちっとも変りない創造的な仕事として作品を出さなくてはいけないんだと思う。そしてそこに出た作品は、瞬間瞬間に、みんなそこで消えてしまって、見た人の眼底に残っているだけです。そういうはかない仕事なんだけれど、やはり作品としてこれを見よと問いかけてみる以外にはないと思うんですね（「おとなたちの出来ること」）²²。

林はこの斎藤の主張に対して、対論時には強く反駁することはなかった。ただし後年の論考「教育には作品はあるだろうか」（1979年）のなかで、斎藤とのかつての対話に改めて言及して、やはり教育には作品はないとして、斎藤の見解を明確に否定する。林の議論はあくまで創作・制作と行為・実践を峻別するプラトンの主張を前提としている。制作の場合、人間の活動はあくまで手段であり、活動の目的はその結果として作り出される物・作品である。対して行為の場合は、行為自体が目的であって、その活動の結果何が生まれようとも、それが目的となることはない。あくまで教育は制作ではなく、行為なのである。故に作品をつくることは、教育の目的ではありえない。「教育という行為には、やはり、「私がこれを作った」ということの許される作品はない」²³。林がここで主張している論旨は、至極正当であり明快なものであろう。

ただし瞬間瞬間に消え去ってしまうはかない仕事（斎藤）でもある教育の残響・痕跡は、子どもたちの残した感想や授業中の写真のなかに確かに読みとれよう。ここで林竹二という稀代の授業者は、自らが発する強烈な磁場作用のなかで、きわめて独自の学習を組織しえたことを想起しておきたい。子どもたちの感想や写真が、はたして教育による作品であるかどうかは別としても、それらはあくまで林による授業という強烈な磁場形成のなかで生成している。個々に感想や写真を単独に論ずるときには、そうした磁場生成の文脈形成から引き離されて、い

わば意味づけが宙づりになってしまうのである。本稿で論じる映像としての授業についても、それを映像「作品」として論じることになる。

子どもの印象的な感想や訴求力のある写真であれ、授業の忠実な筆記録であれ、あくまでそれらは授業が残した残響・痕跡なのである。それらからある程度は、授業を再現し、追体験することはできよう。ただしそれでも授業そのものがもつ一回生起的な生命—生動的なダイナミズム—との疎隔はやはり大きい。特に林竹二の授業では、その傾向が顕著である。「授業記録」からは授業の生動感、演劇でのシナリオのように何ら実体的には捉えることはできない。それはあくまで結果として事後的に確認しうるのみである。林はかつて授業の映画を製作することの意義について、「直接授業を見たり、感想を読んで知る以上に、明確に教えてくれるものになるのであれば、映画をつくる理由はない」²⁴ときっぱり述べていた。撮影に臨んだグループ現代のスタッフがまさに腐心していたのは、授業の生動感を写し（移し）撮ろうする至難の作業であったのだ。撮影に臨んだカメラマンの一人が、カメラのレンズを魂の吸取り口とも形容していたことも想起される。

教育学者の安彦忠彦は、林竹二の授業の特殊性として、次の要素を挙げていた。(一) 多くは一回限りの、外部からの訪問授業であり、子どもとの間には固定した関係がないこと、(二) 授業の主題は「人間とは何か」に収斂すること、(三) 子どもは評価の対象ではなく、成績とは無関係であること、(四) 授業の成否を、ほとんど子どもの感想文、写真による表情からのみ判断していること、である²⁵。特に(四)についてであるが、ここに恣意的な評価、一般的な断定、不用意な自己絶対視等が秘かに忍び込む余地がまったくないとは言えないであろう。林による授業の卓越性の成否もまた、この際どい一線の自覚的限定にかかっていたと言ってもよい。

ここで改めて気になるのは、本稿全体の視点ともなっている「映像のなかの教育 映像としての教育」ということである。映像のなかの教育 映像としての教育は、やはり授業そのものとは違っている。小野成視による写真やグループ現代の映像は、授業の映像記録として実際の授業に対して、決して「撮る／盗る」関係にあるのではなく、あくまで「写す／移す」関係にあるものと理解される。ただしこうした写し／移しの関係とは、たんに授業をそのままに、という事を意味しない。実際の授業にはそれ独自のコンテクストがあるように、映像表象としての授業にも、それ独自のコンテクストが伏在している。グループ現代の四宮鉄男は映像制作者の立場から、この点について「当然のことながら、実際の授業と映像の授業

とは大いに違う。わたしたちは、映像だけの世界の中でそれを完結させようとは思わない」²⁶とも自覚的に述べている。

繰り返しとなるが、本稿の主題は映像記録を映像テキストとして「読み解く」ことにある。この映像の読解とは、ある特定の教育言説（言語テキストとしての教育思想）にもっぱら準拠・依拠しながら、映像表象をそれに平仄を合わせてなぞっていくような読解を意味しない。むしろそれは映像というイメージ、視聴覚表象のあり方から、教育言説が孕んでいる統語法（物語進行の連続性）と視聴覚イメージとのあいだのズレ（齟齬・軋轢・葛藤）により注視しようとする批判的な読み方である。それは「映像による世界知覚、イメージとしての世界理解と、言語による認識との狭間、映像と言語との乖離といった次元を異にする臨界」(稲賀繁美)²⁷を見極めながら、教育的言説の射影を越え出る可能性を孕んだ映像表象の潜勢力を吟味しようとする試みである。教育における言語テキストと映像テキストは、相互に緊密に交叉・交感し合いながらも、実際には相互に軋轢・齟齬・相克の状況を抱えてもいる。

こうした解釈学的状況を踏まえてみると、むしろここでより重要なのは、様々な文脈相互のあいだの交叉・交流のなかで、そこに新たに開かれてくる意味（地平）の吟味であろう。そこでは映像のなかで語られている事柄がたんに真実か、どうかといった問いはもはや一義的なものでなくなっている。いわば一期一会の授業と一期一会の撮影とが相互に切り結ぶ一回生起的な瞬間の局面。なにやら解釈学的循環めいた物言いに陥ってしまうのだが、〈授業—写真—映画〉というテキスト複合の状況において、そこにどのようなコンテクストが新たに生じてくるのか。そのことの確認こそが、映像表象の解釈学としてより肝要な点になるのである。

第二章 二人の人物（一）一校長・安里盛市

1975年5月

林竹二の授業の映像化をめぐるドキュメントにとって、1975年は重要な年である。前節でも触れたように、この年の初頭1月13日には、後に林の授業の専属カメラマンともなる小野成視が、初めて林竹二の授業に撮影参加している。翌月2月19日には、当時の文部大臣永井道雄による授業視察が同じく千代田区立永田町小学校三年生の教室で行なわれる。

文部大臣の永井は、林の授業を視察した当時の印象を次のように述懐している。

林先生の授業をわたしが文部大臣をしているときに見ました。一生懸命おやりになっていた。林先生の授業を批判する人はいます。批判されても仕様がなない面もあるかと思う。なぜかという、おじいさんが来て授業をするんだから、子どもはびっくりする。こんなおじいさん何しに来たのかって。そこへもってきて「人間とはなにか」っていう授業をする。何十回もやっているから、ベテランになっていて聞かせどころを知っている。類似の内容の授業をやっているのだから、うまいはず。そういう意味では林先生を神秘化してはいけないと思います²⁸。

教育社会学者としての永井の冷静な眼差しが感じられる文章である。またその回想では遡って1965年頃の林との初めての出会いを回顧しながら、明治草創期の思想家たち、とりわけ両者の研究に共通する森有礼研究での共感を漏らしている。また永井は、林が東北バンド（阿部次郎）の系譜を引き継いでいる点をいみじくも指摘しており、そのことが後年の九州・熊本バンドに連なる思想家たちへの関心へと繋がったものと推測している²⁹。

永井の授業視察当日の様子も、小野カメラマンによって、克明に記録撮影されている³⁰。この日の授業にはまた、後にたびたび林竹二の産婆的対話役を果たすことになる演劇演出家の竹内敏晴が初めて参加している³¹。

この間の事情をもう少し年譜的に述べておこう。1975年5月15日から三日間にわたる初の沖縄訪問授業（授業番号：165～168）³²が那覇市立久茂地小学校で行なわれる。この林の沖縄訪問授業の直接の機縁となったのは、前年1974年に淡路島で行なわれた「教授学研究の会」第一回夏の公開研究大会での林及び研究会世話人の斎藤喜博（1911～81）と久茂地小学校校長の安里盛市（1918年生）との邂逅である。安里校長からの懇願を受けて実現したこの初の沖縄訪問には、斎藤が同行している。この訪問授業での子どもたちの様子も、同行した小野カメラマンによって、克明に記録撮影されている³³。この沖縄訪問から帰仙して間もない5月23日には、林がセンター長を兼ねる宮城教育大学附属の授業分析センター（現在、附属教育臨床研究センター）³⁴開所式の記念授業として、附属小学校の四年四組で授業「人間について（ビーバー）」（授業番号：169）が行なわれる。翌月6月15日には、林は宮城教育大学学長を任期満了（二期6年）により退任する³⁵。

因みに授業分析センターの開所記念授業の様子を記録した記録映像（大学附属図書館所蔵）³⁶を見ると、それはなるほど記念授業とは言え、教室の子どもたちを取り

囲むその物々しい雰囲気には改めて驚かされる。開所式当日、「センターの壁には、小野（成視）氏が東京の永田町小学校や日本女子大学附属小学校で撮影した子どもたちの写真が大きく引き伸ばされ、掲示されていた」とのことである³⁷。

教室中央には35名ほどの小学生が体操着を着て、整然と並べられた机に向かって着席している。映像カメラは教室前方の壁の高い位置に設置（遠隔操作）され、教室全体を俯瞰している。教室窓際や教室背後には数多くの学校関係者・撮影スタッフが待機しており、子どもたちをまるで包囲するかのように陣取っている。映像では仰々しい大型のカメラ数台がとりわけ目立っている。

林竹二の数々の公開授業は、写真資料から推し量れる範囲ではあるが、おしなべて子どもたちの周囲には多くの学校関係者、保護者、撮影スタッフ、報道関係者などがぎっしりと詰めており、その物々しさには、幾分われわれの予想を越えるものがある³⁸。

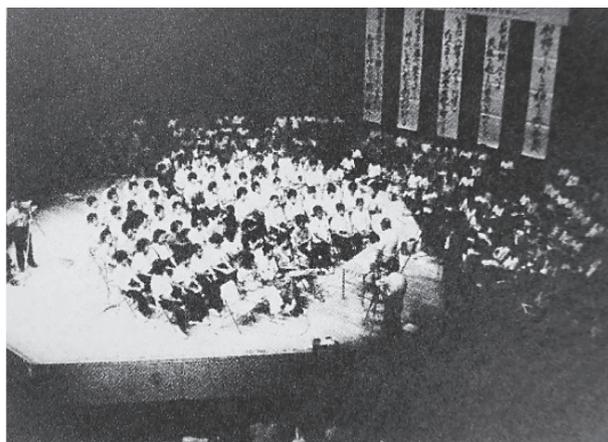


図2-1 兵庫解放教育研究大会（ルナ・ホール）での公開授業（1977年8月）



図2-2 山形市立明治小学校体育館での公開授業（1981年）

この記念授業の映像を眺めても、教室には似つかわしくない騒然とした雰囲気のなかで始まる授業に接する子どもたちの緊張した様子が直に伝わってくる。授業者で

ある林自身も表情は硬く何かしらぎこちない様子を見せており、遠隔操作による機能的なカメラ・ワークが映像全体に機械的で無機質な雰囲気を出し出す。それは二年後、沖縄で撮影された記録映画のなかのいかにも自然な佇まいと比較してみると意外の感に打たれてしまう。

さて1975年5月に始まる林竹二の沖縄訪問はその後毎年のように繰り返されて、1983年4月の最後の訪問まで全八回に及ぶことになる。ただし五回目の訪問（1979年3月）は、安里盛市校長の退職の時期にあたっており、もはやそれ以降の沖縄訪問は訪問授業ではない。沖縄大学での記念講演、宜野湾市での教育講演会、沖縄タイムス社主催の教育講演会「沖縄の教育に望むもの」（那覇市）などである。この林の沖縄訪問授業のうち、第三回目（1977年2月）と第四回目（1978年2月）に、グループ現代による授業の映画撮影が敢行されている。

本稿ではまず、林による沖縄訪問授業実現の直接の機縁ともなった人物として、那覇市立久茂地小学校校長の安里盛市に言及しておきたい。次いで林の思索上の産婆的対話の相手を務めた人物として、演劇演出家の竹内敏晴に焦点を当てながら記述を進めていきたい。竹内は沖縄での授業の映画撮影（1977年）の現場にも直に立ち合っている人物であり、その証言は本稿にとって大変貴重である。

校長・安里盛市

安里盛市は1918年沖縄に生まれ、1938年に沖縄県師範学校本科を卒業後、沖縄各地の小学校校長を歴任した後、1973年に那覇市立久茂地小学校に校長として赴任する。その翌年、淡路島で行なわれた「教授学研究の会」第一回夏の公開研究大会に参加して、初めて林竹二・斎藤喜博との知遇を得ることになる。その間の経緯について、安里は次のように記している。

林先生がはじめて久茂地小学校に入られたのは、昭和五十年の五月であった。

私は、その前年の夏、淡路島での教授学研究の会公開研究大会に参加して、感銘を深くした。

「授業」というものが、子どもの心を開き、子どものなかに、新しい世界をつくるための創造的な仕事であるということを知ったからである。

私は今まで、そういう深い意味で授業を考えたことがなかった。

「今からでもおそくはない。退職まで後四年、日暮れて道遠しの感はあるが、そういう深い授業に取り組んでみたい」と思った³⁹。

安里によると、斎藤喜博の個人雑誌『開く』にその旨を記した記事が偶々林の目にとまり、そのことが機縁（「安里さんの学校で授業をしてみたい」⁴⁰）となって、後の林の沖縄訪問授業に繋がることになる。

安里宛の林の書簡（1975年4月23日）から引用してみる。

御手紙拝見しました。授業は、「人間について」で、四年と六年と各一組ずつということで如何でしょうか。・・・

五月十四日の十〇時に羽田を発ちます。帰りも斎藤先生と御一緒に、十七日十三時四十五分で沖縄を離れます。到着の日に一度、琉球大学を訪問します。あるいは、もう一度大学にゆくかもしれませんが、あくまでも御校での授業、研究会を第一に考えています。

すべて先生に御一任します⁴¹。

この初の沖縄訪問では、三日間にわたる久茂地小学校での授業のあいだに、那覇市教育委員会主催の講演会、教職員組合との懇談会をはさむ、かなり厳しい日程で行なわれている。ただし林にとって沖縄での授業（特に六年生「開国」）は会心の授業⁴²ともなったようである。その際に受けた強烈な印象と刺激は、後に「久茂地の子どもたち」について語る口吻にも鮮やかに現れている。

去年（一九七五）の五月、私ははじめて沖縄を訪れた。訪問の目的が斎藤喜博さんといっしょに那覇の久茂地小学校で授業をすることであったので、三泊四日の滞在中、ほとんどすべての時間を私たちは久茂地小学校の子どもたちと教師とともにすごした。だから厳密には、私が訪ねたのは久茂地小学校だと書くべきかもしれない。あるいはそれだからこそ、私にとってそれは沖縄訪問であり、大きい重い経験であった⁴³。

沖縄・久茂地小学校

この訪問授業の舞台となった久茂地くもじ小学校は、1911（明治44）年に創立された久茂地尋常小学校を母体として誕生した長い歴史を誇る小学校である。戦後は先進的な教育への取り組みでも知られ、林竹二・斎藤喜博両氏による沖縄訪問以降も、教授学研究の会を中心に長期間にわたる教育研究活動が久茂地を舞台として展開された⁴⁴。那覇市の中央部に位置しており、那覇国際通りにも大変近い立地である。2014年に隣接学区との統廃合を受けて閉校した。因みに筆者が同校跡地を訪れた折（2019年11

月)には、跡地利用として新たな文化芸術施設の建設工事のために学校敷地はすべて掘り返され、映像や写真で見慣れた校舎の面影はもはやまったく残っていなかった。

二度目の沖縄訪問を直前に控えた1976年2月9日、朝日新聞に掲載された林の「久茂地の子どもたち」の記事には、沖縄に対する深い愛情と強い共感が吐露されている。

私はいますぐにでも沖縄に飛んでゆきたい。授業のなかの久茂地の子どもたちの反応には、その質の高さとつよさと厚みにおいて、本土の子どもと格段の違いがある。同行した小野成視君のうつした写真も、そのことをはっきり裏付けている。これはもはや子どもだけの問題ではない。より根本的にかねらの育った世界、すなわち**沖縄の歴史と文化、そして人間の問題**にかかわっているのであろう。……

沖縄は私たちに一種の郷愁をかきたてる。それは、人間として生きるのになくてはならぬものの喪失が、われわれの間につくり出した空虚をうめるものが、あそこにはあるからではないだろうか⁴⁵。

この文章が持つ意味を深く理解するためには、もう少し注釈が必要であろう。

林竹二が沖縄を毎年連続して訪問し、授業実践を続けた期間は、安里の校長退職(1979年4月1日)までの在職期間とほぼそのまま重なっている。その沖縄訪問は、実に安里盛市との強い絆によって繋がっているのである。安里宛書簡にも「先生が久茂地を去られる以前にもう一度、那覇にゆきたい気がしきりですが、どうなりますか(1978年8月22日)」、「先生が久茂地小学校にいらっしゃるうちにもう一度お訪ねしたい。私にも離れがたい思いのつよい久茂地小です(同年10月18日)」、「先生のいなくなった久茂地小学校を考えるとひどく淋しい気がします。もう久茂地の子どもたちと会う機会がないのだと思うとひどく淋しいのです(1979年4月21日)」、「さらに死去(1985年4月1日)するおおよそ三か月前にも、病床からの最後の書簡で「安里先生、先生がおいでにならなかったら私は久茂地の授業をすることも、したがって授業についての考えをふかめることも出来なかったと思います」(1984年12月21日)などと、切々と心情を訴えている箇所が散見されて胸に迫る。

安里の退職時に当たる五回目の沖縄訪問(1979年3月)は、もはや訪問授業ではなく、それ以降の訪問は沖縄大学での記念講演、宜野湾市での教育講演会、沖縄タイムス主催の記録映画の上映会と教育講演会「沖縄の教育

に望むもの」(那覇市)などである。その五回目の沖縄訪問の直前に、安里宛の書簡(1979年3月3日)には次のように記されている。

タイムスでする講演の演題は次の二つのうち一つにしたいと思います。

- 1、私は何故沖縄でだけ授業の記録映画をつくったか
- 2、沖縄の子どもたちは、本土の子どもたちより較べものにならないくらい学ぶ力を持ち、よい素質をもっているのに、何故つまらない、破産してしまった本土のくだらない教育のあとを追っかけることに窮々として、殊玉のような沖縄の子供のもつ貴重な資質を泥土に委ねるようなことをするのかと、その愚かであるばかりでなく、犯罪的な行為を止めさせることにすこしでも役立ちたいのです⁴⁶。



図2-3 参観中の安里盛市校長

沖縄の本土復帰(1972年5月)から間もなく始められた林の沖縄訪問授業ではあるが、その歴史のなかでの性格を理解するには、本土復帰以前の沖縄の教育にも言及しておく必要がある。

何よりも明治以来の中央政府による皇民化政策に逆行させてはならないと深く感じていたのは、沖縄の父母であり教師たちである。そうした自覚は戦後教育の原点でもあった。戦後沖縄での本土復帰運動の中核を担っていたのは、沖縄教職員会に所属する多くの教員たちであった。1950年代後半から本土では教育行政による学校・教員に対する統制が強化(「学習指導要領」の法的拘束力の認定、教育委員会の「公選制から」任命制度化、教員の勤務評定実施等)されていくのに対して、沖縄の人々があくまで民主的な教育行政を希求する熱意は強く、「七〇年前後から、本土の教育関係者のなかには、沖縄から学ぶ必要を痛感する者が増えていた」ようである⁴⁷。ただし本土復帰運動は、ともすれば「本土で支配的な教育をそ

のままとりいれるという動き」⁴⁸を生み出しやすい。

安里は林の書簡の注釈として、当時の沖縄の教育を取りまく社会状況について、次のように記述している。要約して紹介してみよう。

沖縄の教育は戦後貧しいながらも、戦前からの皇民化教育の呪縛から脱して、教育行政も学校現場も教職員団体も一体となって、自主独立の歩みを始めた。ところが当時の文部省による全国学力テスト（1956～66）では、結果は全国最低に陥る。これを境に事態は一変し、その後学力最低県からの脱出のみが沖縄の教育（行政・現場・県民に渡る）の最重要課題となってしまった。当時の資料によると沖縄のみならず全国でもテスト成績の「都道府県の激しい順位競争が行われ、いくつかの県ではテスト対策のみならず、教員がテスト中に子どもに答えを教える不正」さえ生じていた。また特に競争の激しかった県では、「学力テストの成績を向上させるため、テストの当日に成績の悪い子どもを休ませることが組織的に行われていた」⁴⁹とさえ伝えられている。

さて沖縄県教育委員長の「学力低下の最大の責任は教師にある」との発言を導火線として、県内の学力論争は一挙に火がつく事態となる。これまでひたすら内に向けていた目をもっぱら外だけに向けるようになり、本土教育との比較、学力低下論争（犯人探しと責任のなすり合い）のみの本質が抜け落ちた不毛な論争に終始してしまう。いたずらに本土の教育との比較に拘泥し、学力（点数）の低さでもって、沖縄の教育全体を否定し去るような風潮が、マスコミを通して蔓延するようになった。すなわち明治以来の差別的な皇民化教育で陥った沖縄の劣等感を払拭すべく、やっとな中央志向の教育と訣別できたのに、戦後再びその亡霊が蘇ってきたわけである⁵⁰。

戦後沖縄の教育と文化を語るには、琉球以来の「外来のものを尊いとする感覚」、外部からの評価に強く反応して、それを鏡として「沖縄文化」の自画像を描こうとする根強い性向を考慮して慎重に語る必要がある⁵¹。たとえば方言についても、戦前に沖縄を訪問した民藝運動の柳宗悦は、方言を禁じようとする当時の動静に疑義を呈し、「方言論争」を引き起こしたが、地元メディアではほとんど顧みられず立ち消えとなった。因みに安里は、かつての中央政府からの沖縄同化政策の象徴的な一事例として、戦前における「方言札」という標準語励行政策を挙げている。それは「学校で方言を使用したものに渡される罰札で、それを貰ったら誰か他に方言を使った生徒をみつけてその札を渡さなければならない」といったレー方式による罰則慣例であった。国民精神総動員と相まって、標準語励行運動は苛烈さを増し、「沖縄的なるも

のはことごとく劣れるものであるかのよう」に強烈に観念づけられていった、とも記述している。安里によるこうした記述も、かつての沖縄の教育現場を知る小学校校長としての一証言として傾聴に値しよう⁵²。

授業の内観法

ところで後年、安里盛市は林竹二の授業について、ある事柄に触れている。林の授業は一般的な授業観からすれば、それは子どもの発言も少なく、教師の話す時間が多い地味な授業である。それは一見、大学での講義様式をそのまま、小学校の教室に持ち込んだような授業形態でもある。児童に接するその表情は大層柔和であり口調も優しいが、その論理の追求は執拗であり粘着的とさえ呼べるほどである⁵³。映像的にも写真映えのする授業とは、とても言い難い。注目すべきは一見すると旧弊な一斉教授方式にも見紛うようなその授業が、一般の教師から必ずしも評価・支持されていないにもかかわらず⁵⁴、子どもたちの内に深い変容をもたらす点（魔法のような授業：五年生）についてである。

ここで林竹二の授業論を、本論での映像的視点と関わる範囲で一度整理しておこう。教育学者の安彦忠彦は、林晩年の時点（1981年）でその授業論の特徴を同時代において比較的公正に批評している。その議論によれば、林の授業論の特徴としては、(一) 子どもたちからその可能性を引き出す仕事、(二) 子どもたちが、自分たちだけでは決して到達できない高みにまで、自分の手や足を使ってよじ登っていくのを助ける仕事、(三) カタルシスとしての仕事、(四) 子どもの中に何事かを起こさせる仕事、以上の四つが挙げられる⁵⁵。(一)と(二)については、林のかつての同僚でもあった斎藤喜博などの教育実践家が主張しているものと重なる。そこでとりわけ(三)と(四)が林独自の授業論の特徴として指摘されるのである。この(三)の浄化と(四)の変容の両者は本質的に相互に深く関わっており、映像論の視点からも焦点化されやすい局面ともなる。

ところで安里は「先ず私達は授業を観る目のあり方を問題にしなければならない。授業を外側から観るか、内から観るかという問題である」と端的に述べている。授業の真価とは、たとえば子どもたちが活発に挙手をするかどうか、といった外的な通念によって測られるのではなく、あくまで「子どもの中に何が起き、何が動いたかということがより重要な観点となるのである。授業を外から観るのではなく内から観ていこうとする姿勢である」⁵⁶。

安里がここで指摘している授業の観方、いわば授業の内観法とでも呼べるような観方と、授業の内在的理解に基づく撮影技法（ここでは写真による映像化）とは実は

深く繋がっている。安里は林の授業に同行した小野カメラマンの撮影した写真に接したときの驚きを述懐している。

この授業を撮影したカメラマンの小野さんの写真を見て驚いた、そこには、林先生の授業に集中している子どもたちの顔が鮮やかに写し出されていたからである。その顔は生き生きと輝き、周りに参観者が居るのも忘れたかのように無心になって集中し、深く考えている顔であった。活発な発言は無くとも子どもたちの内面に何かが動いていることがありありと読み取れる顔であった⁵⁷。



図2-4 久茂地小学校四年 撮影：小野成視（1975年）



図2-5 久茂地小学校四年 撮影：小野成視（1975年）

授業の本質を内観しようとするとき、外的な眼差しからは見逃されてしまう事柄が改めて浮き上がってくる。安里がとりわけ注視するのは、ふだんは教師からも級友からも忘れられた存在の子ども⁵⁸たちである。その子どもたちが残した、誤字が多く、金釘流の文字でたどたどしく綴られた一見、稚拙な感想の文章、あるいは「その顔は写真の中のどの顔よりも深く授業の中に入っている顔であり、その精神の集中度においてははるかに他の子

どもをしのぐものがある」特殊学級の子どもの表情など。「小野カメラマンの写した授業の中の子どもの写真を見せられたとき、私はこの固定観念から覚め、今まで見えなかったものが見えてくるようになった」（安里盛市）⁵⁹。ここでは授業のなかで普段は見えないものを確かに見届けようとする内観の眼差しと、小野のカメラのシャッターレンズを通して固着された見える映像とが、交叉し共振し合っているのである。

グループ現代

二度目の沖縄訪問授業（1976年2月23日～26日）を終えた年の七月、林から安里に対してある相談がなされている。本稿にとって重要な資料であるので、そのまま引用してみる。

一つ相談があります。グループ現代という記録映画をつくっているグループが二年程前、私の「授業・人間について」を読んで、私の授業をそのまま是非映画化したいと考え計画を練っていたのですが、四月にはじめて私にその旨を申出て許可をもとめてきました。それから四、五回会合を重ね、私の授業も見、考え方をふかめ、何度となく案を練り上げつつあります。・・・実に真面目でよく勉強し、理解もするどくふかいのに私も実はおどろいています。私は彼等に次の条件をつけました。

- 1、林が主人になる映画ならつくらない。主人はあくまで「授業」であること。
- 2、詳しい計画を立て何度も具体案をつくりなおし、私がこれならよいというものがつくられたとき同意する。それまでは時間と労をいとわず、授業とその映画をつくるための諸問題にとりくむこと。
- 3、授業をする場所としては、久茂地小学校以外に考えない。
スタッフは十五、六人は必要（カメラは6台）で、沖縄でやれば、費用は東京付近や仙台でつくるのとは、くらべものにならないくらい嵩むのを避けがたいのですが、私としては、久茂地の子供でなければ、全くその気になれないのです。ですから安里先生がこの企てに賛成して下さらなければ、この話は成り立ちません（7月16日書簡）⁶⁰。

安里に授業の映像化を初めて相談するこの書簡の後、九月の書簡には次のようにある。

過日お話ししましたグループ現代が、私の授業を撮影したいという申出を、慎重に検討した結果、承認いたしました。・・・

グループ現代の人たちは、本当に「授業」を主人公とする映画をつくりたいと、驚くほどの熱意を示しています。すでに私の授業も十数回見、討議を重ね、何度も計画を徹底的に練り直しております。

これならたしかに意味のある作品が期待できるだろうと信じて、許可を出しました。

一行は八人くらいの予定です。安い宿泊施設を世話していただければ幸いです（9月27日書簡）。

これらの書簡によると、林とグループ現代とのあいだで、かなり綿密な準備と覚悟のもとで撮影計画が練られていたのが窺われる。グループ現代側の撮影に対する姿勢としては、映画撮影の企画構成にあたった四宮鉄男の記述が参考となる。

私の心のうちで、なんとしても林先生の授業を映画面に撮りたいという気持ちに駆りたてたものは、私の息子と娘に、林先生の授業を受けさせたいという思いでありました。・・・

林先生が教室に入ってきてボンと言葉を放り、その言葉があちこちの子どもの中をはね廻るうちに、ある言葉は子どものからだの中に棲家をつくり、ある言葉は物質化して、ふくらんで、イメージをつくりあげ、そうした中で、林先生と子どもたちが共同作業をしながら、ひとつの形あるものがどんどん大きくなっていくような、そうした授業をフィルムに撮りたいと思ったのです⁶¹。

この証言にはグループ現代、とりわけ四宮の撮影にかける姿勢が鮮やかに現れている。それは教師の語る言葉への関心である。本来、映像でもって語ろうとする映画人にとって、空疎で内実が伴わない言葉は嫌われる。ただし四宮は林の授業に接するうちに、驚きをもって「事実を支えられた具体的な質量を持った言葉」と遭遇する。「私は恐ろしいものを見た思いがした。言葉の実態的な力を見せつけられたような気がした」⁶²。そこでは授業の言語と映画の映像とが交互に切り結ぶようなかたちで、一期一会の授業と一期一会の撮影との邂逅が期されていたのである。

障害と克服

林の安里宛書簡では、撮影の許諾を安里に報告する1976年9月27日付けの手紙の直後、グループ現代が撮影打ち合わせのため、10月20日に沖縄を来訪する旨が記さ

れている（10月3日付）。当初の計画では、久茂地小学校での授業の撮影は11月8～9日に予定されていたようだ⁶³。こうして映画撮影への機運は一気に熟していくことになるが、ここにある深刻な事態が突如立ちはだかる。グループ現代の沖縄訪問が予定されていた10月20日同日に、林は北海道での授業巡礼の途上、帯広から旭川へ向かう車中、脳血栓で倒れる。仙台に戻ったのち、12月2日まで東北大学附属病院に長期入院することになる⁶⁴。後に当時の病状について林は、脳血栓の発作のために「右手の指が凍ったようになったのです。字も書けず、ハシも使えなくなった」とも述懐している⁶⁵。

参考までに、林が病で倒れる前後の授業巡礼の日程については、以下のように記録されている（記録：横須賀薫）⁶⁶。

1976（昭和51）年10月

- 1日 盛岡市U小学校（授業）
- 2日 岩手県岩手郡N中学校（授業）
- 3～5日 青森県下北郡S町（授業、講演）
- 6日 帰仙
- 7日 仙台一大阪（移動）
- 8日 岡崎市F小学校（講演）
- 9日 神戸市W小学校（授業）
- 10日 神戸市内（講演）
- 12日 和歌山市F小学校（授業）
- 18日 仙台一札幌（移動）
- 19日 釧路市（講演）
- 20日 帯広市K小学校（授業）
- （20日 帯広から旭川への移動中、脳血栓により倒れる ※以下の日程は当時の予定）

- 21日 旭川市F小学校（授業）
- 22日 旭川市H大学（講演）
- 25日 札幌一三沢（移動）
- 26日 十和田市S中学校（講演）
- 28日 鶴岡市（講演）
- 29日 酒田市S高校（講演）

11月

- 1日 宮城県O小学校（授業、講演）
- 5日 宮城教育大学大学祭（講演）
- 8～9日 那覇市K小学校（授業、映画撮影予定）
- 12～13日 広島県O小学校（講演）
- 17日 水戸市F小学校（講演）
- 19日 東京（対談）

22日 東京 M 小学校（講演）

26日 盛岡市（講演）

この記録によれば10月から11月の二か月にかけて、授業9回、講演14回、対談1回の日程が長距離での移動日を挟んでぎっしりと詰められている。もともと持病を抱えていた林の高齢（当時70歳）と当時の交通事情（たとえば東北本線の特急仙台～上野間では四時間半ほど要した）などを勘案してみれば、自らが課したものとはいえ、「三流歌手のドサまわりよりもひどい」とも自嘲していたその授業巡礼の旅程がいかに過酷なものであったか想像できよう。と同時に、子どもへの授業にかける林の熱情が窺える記事である。

撮影の無期延期といった事態に直面して、安里校長は「グループ現代の授業撮影は永久にだめになった」⁶⁷ものごと一旦観念している。ただし授業の映画撮影にかける林の執念はすさまじく、時期変更による撮影の敢行が改めて提案されることになる。大学病院入院中の病床からの書簡（11月24日付け）には、ペンの運びもおぼつかなくなつた筆跡で、次のように記されている。

御心配御かけした私の病氣も大変経過が良好で、不自由になつた右手も、この程度に一この手紙を認めることが出来るくらいまで機能を取りもどしました。時間はひどくかかります。私の授業の撮影計画について、病氣によって変更を余儀なくされ、御迷惑を御かけしましたが、グループ現代とも話合いました上、次の様な方針で御協力ねがいたいと考えておりますが如何でしょうか。

1、撮影時期は、五二年二月ははじめ。・・・

こうした困難な経緯のもとで、林竹二による沖縄での授業の映画撮影が初めて実現するのである。

次節では、林の病氣を抱えて緊迫した状況のもとで撮影されたこの授業映画の詳細について、さらに触れていきたい。

第三章 二人の人物（二）一演出家・竹内敏晴

竹内敏晴の述懐

グループ現代による授業の最初の映画撮影は、1977年2月8日に那覇市立久茂地小学校三年四組（「人間について：ビーバー」授業番号：232）で、翌日9日に五年二組（「人間について：アマラとカマラ」授業番号：233）で行

なわれる。ここではまず、最初の映画撮影がなされる緊迫した状況をめぐって、林の授業の映画撮影に密着して同行した演劇演出家の竹内敏晴（1925～2009）による述懐から始めたい。

林先生の『授業一人間について』の映画を私はしばらくぶりに見直すことができた。いきなり沖縄の久茂地小学校校庭のパーンが映し出され、精一杯遊び回っている子どもたちの姿を見たとき、私のなかに懐かしさが広がった。一九七七年の二月である。季節的には冬でも、まるで初夏に近いような身装りで子どもたちは飛び跳ねている。タイトルに続いて、林先生が廊下をゆっくり歩いて行かれる背中が映る⁶⁸。



図3-1 那覇市立久茂地小学校 校庭風景

今からほぼ半世紀以前の、もはや現存しない校舎の風景と校庭で遊びまわる子どもたち。そこにはどこか学校原風景とでも呼べるような雰囲気漂い、淡い郷愁さえ憶えさせるような映像である。

竹内敏晴の略歴について、ここで簡単に触れておこう。竹内は1925年、東京生まれ。東京大学文学部卒業後、劇団ぶどうの会演出部に所属。代々木小劇場＝演劇集団・変身を経て、1972年、竹内演劇研究所を開設。1973年、宮城教育大学非常勤講師。1977年、沖縄での林の授業撮影に立ち会う。その後、林とともに兵庫の湊川高校の授業に入る。2009年死去。享年84歳。主な演出作品に『長い墓標の列』（福田善之）、『明治の枢』（宮本研）、『沖縄』（木下順二）などがある。

前節でも触れておいたが、竹内敏晴は、永井道雄文部大臣の授業視察（1975年2月19日）が行なわれた永田町小学校の教室で、はじめて林竹二の授業を経験した。ただし竹内が初めて林竹二の名前に接するのは、遡ること

さらに1962年秋のことである。それは『思想の科学』9月号に掲載された林の論文「抵抗の根—田中正造研究への序章—」を介してのことであった⁶⁹。当時林は56歳、三月に東北大学から文学博士号を取得したばかりである。竹内は37歳、演出家岡倉士朗に師事しながら、劇団ぶどうの会演出部に所属していた。当時劇団ぶどうの会では、当時一般にはあまり知られていなかった異色の政治家・社会運動家の田中正造を取り上げた演劇の制作に取りかかっていた。「近代以前の封建社会の基底で育まれてきた人民自治の思想」⁷⁰の代表者としての田中正造(1841～1913)である。竹内は直接林に手紙をしたため、林から資料その他の協力を得たことが二人の関係の機縁となる。

その後両者の関係は十年間ほど途絶えるが、1973年に林が学長を務める宮城教育大学に竹内は非常勤講師として偶々招聘される。この教育大学への招聘は、林学長の意向によるものではなかった、とも竹内は記している。

十年たって、全然別の経路で、宮城教育大学に、からだとことばについてのレッスンを授業でやってほしい、と呼ばれて行きましたところが、たまたま学長が林先生であった。

なんだ、この人は私は知ってるよ、と言われたそうで、それでもういっぺん、お目にかかった。十年ぶりにお目にかかったのです⁷¹。

ほぼ十年ぶりの再会後、この両者の関係は、1975年2月の永田町小学校での授業体験へと繋がっていくのである。実はこの両者の関係には、後にグループ現代が深く関わってくる。前節でも触れたように、1976年4月に林に対してグループ現代からその授業の映像化の打診がなされている。その際、林からグループ現代のいわば資格審査の任を託されたのが実は竹内敏晴なのである。

グループ現代が林先生の授業の映画を撮りたいと言い出した。グループ現代のメンバーの中には、私のレッスンを受けた人達が何人かいるのです。林先生から電話があって、今度こういう申し入れがあったけれども、竹内が、資格審査をせい、という。資格審査というのは変ですけども、つき合っ信用できるかどうかというようなことで、先生の「人間について」の本をテキストに討論するなんてこともありまして・・・(竹内敏晴)⁷²。

こうした竹内の述懐からも、授業の映像化に対する林の慎重な態度が窺われよう。

ここに林竹二—竹内敏晴—グループ現代の三者を繋ぐ緊密な糸が結ばれる。因みに「私のレッスン」とは竹内が主導する独自の演劇知に基づいた「からだところのレッスン」のことと思われる。

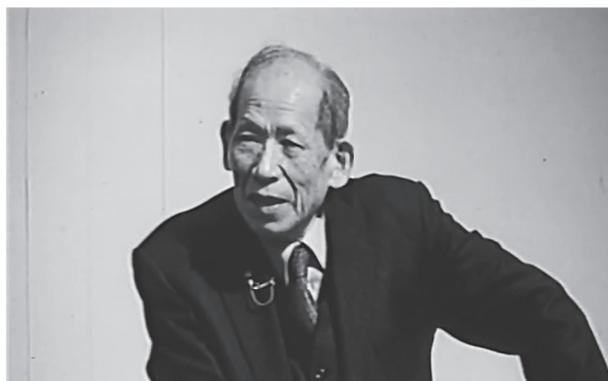


図3-2 講演記録映画「田中正造の最後の戦い」
栃木県佐野市郷土博物館・開館記念講演(1983年11月19日)

からだところのレッスン

竹内は幼少時に患った聴覚障害(慢性中耳炎)、そして15歳時の新薬投与による右耳の劇的な回復過程、及び40歳以降の演劇体験をとおして、ことばと身体との共鳴・共振に対する感受性を非常に鋭敏なものにしてきた。そこからたとえば「声が届かない」という現象、なんとか自分の声を相手に届けようとするのだが、努力すればするほど、かえって声は届かなくなるという皮肉な事態のうちに、話しことばの基本的な問題を洞察している。「距離をおいて、なんとか声を届けようとする努力では、決して声は相手にふれない。声は操作するものではなく、人と人との間身体性そのものが実現してくる力なのだ」。

臨床哲学の立場から鷲田清一は、竹内の話しことばの基本的な問題のポイントを次のように三つに整理している。すなわち(一)話しかけるということは相手にこえで働きかけ、相手を変えることである。ただ自分の気持ちをししゃべるだけではダメなのである、(二)どう変わってほしいのかがはっきりしないと相手は変わらない、(三)声がかまくとどいた感じがしないとき、ひとは声をとどかせようとして、相手との隔たりをあらためて計量し、その隔たりに負けないような音量で呼びかけようとするが、そうすればするほど、相手はじぶんが話しかけられたという感じがなくなるという事実⁷³である。ここで竹内自身の経験から、その独自の身体知を示唆している興味深い事例を引いてみよう。

たとえば、ある程度の広さの教室の演壇の前に立って、マイクを使用しながら人前で何か話すといった経験は教師であれば日常ごく普通のものであり、とりたてて問題

とされるようなものはなさそうである。ただし竹内が記述しているみずからの体験の事例は、意外にも触発的である。

竹内はある大学の中講堂の演壇に立って、当然のごとくマイクを使って聴衆に向かって講演を始める。

ところが奇妙にエコーが大きい。なにか息苦しい気がしてふと気がつくときき手の姿がしんと遠く見える。透明な幕の向うに退いたようで、わたしは全く別の世界にいる。・・・わたしが力をこめて話しかけるほど、声はわたしに戻ってきて、わたしを包み込んでくる。わたしは話せば話すほど、どんどん自分の声のエコーの幕に閉じ込められて、話しかけようにもその向うに出てゆくことができない。

困惑と動揺のなかで竹内は、咄嗟にマイクのスイッチを切る。

シンとした。場内は水が澄んだように、静かさが充ちた。聴き手は不思議そうな顔を上げる。わたしはやっと息を一つして、「この声で聞こえますか？」と声を発した一とたんに全員の注意がサァッと、音を立てたように、わたしに集中した。満場の人々がまさに「聞き耳を立てた」。この一瞬は忘れがたい⁷⁴。

こうした事例がとりわけ興味深いのは、他者に「声がとどく」という日常現象の機微について掘り下げて語ってくれているからである。ここでの他者とは、抽象的に一般化されてしまう他者、あるいはただ理論の上で要請されるような形式的な他者といった意味ではなく、あくまで主体として特殊で、個人的な相貌をそなえて自己に対峙している具体的な他者という意味である。

竹内は続けて語る。「あちこちの人に話しかけるようにして語り出したが、すぐ、声を張る必要は全くないことに気づいた。聞き手のほうが身を乗り出して聞き取ってくれるのだから」。マイクによる音声は音響機器からの響きとして、ベクトルなしに空間に拡散する。そして聞き手は「いわば音の文章を読むのである。だから話し手当人を見る必要もなく、目は別の文献を眺めていたりする。なまみの話し手は全く障害」されてしまう。そこでは人は、他者の声をまさに自分にたいして語りかけられようとしている「こと」としては感受していない。実はそこでは「だれも呼ばれていない、声が届いていない」のである。

竹内によれば、本来聞くということは、「話しかける人を、姿と声の全体で受け取ること」であり、またことば

を話すということは、「人が人とふれ、相手を動かし変えようとする全心身の試み」でもある。したがって話しことばとは「じかで、ただ一回きりの、文内容を越えたなにか、であり、からだからからだへ響きあい、共鳴し反撥すること」として、明らかに情報伝達の一方的交流の閉鎖性／抽象性の様式とはまったく異なる出来事として記述される。

また別の事例として、日常的なことばのキャッチボールの驚くべき姿にも言及されている。そこでは話し手「Aはほとんど相手を見ずに話している。あるキッカケをとらえたBは、相手のことばに答えるというよりは自分の思いを勝手にしゃべり出す、するとAは、といういわばすれちがいを互いに延々と演じて、不思議に思っていないらしい」。これによく似た事例としては、たとえば何人かで話しあった内容を後になって筆記録などによって確認するとき、そのやり取りのちぐはぐさとして、しばしば事後的に経験することでもあろう。「人と人とは、たがいを理解するためにことばを交わすというよりは、むしろ、ふれ合わないために、自分を守り、相手から逃げるためにことばの弾幕を張りめぐらしているらしい」とは竹内の印象的な述懐である。

鷺田はこうしたアイロニカルな発話状況を、次のようにも記述している。

ことばをとどかせようとして声を大きくしたり、身を乗りだしたりすればするほど声はとどかなくなるというアイロニー、ことばを伝えようと意識するよりも、ことばが伝わらないことにいらだって衝動的に発した濃やかさを欠いたことばのほうがきちんと伝わるという、これまた哀しいアイロニー、そして最後に話しかけた相手との距離を測って声量をコントロールすればするほど、相手はじぶんに話しかけられているという気がなくなるという、さらに二重に哀しいアイロニー・・・⁷⁵。

他者に声を届かせる、あるいは他者の声を相互に聴き合うことの難しさは、学校での日々日常のコミュニケーションのあり方にも、特異な歪みを引き起こしている。教室はとりわけ、教育的なコミュニケーションの実践が最も濃密に行なわれる場所である。そして授業の変革とは、つまり教室におけるコミュニケーションの変革にも繋がろう。ただし従来からの授業改革の趨勢は、教育学者の佐藤学が鋭く指摘しているように、子どもの発表力や表現力がもっぱら重視され、活発に意見を発表し合う教室づくり⁷⁶を過剰に追及してきたともいえる。

佐藤は教育的コミュニケーションで最も重要なのは、聴き合う関係であり、話すことよりも聴くという行為が

決定的に重要である、とも指摘する。明るく元気な騒々しきで満ち溢れて、かえって奇妙に硬直化してしまう教室空間を内面から解きほぐし再生するのは、佐藤がいみじくも指摘するような「心と身体を開いて他者の声を聴く」といった他者に全身的に開かれた根本的な姿勢なのであろう。ただ活発に意見の発表を競い合い、努力を誇示するような生徒のみが評価されるような教室ではなく、子どもたちが教師や他の子どもの言葉に耳をすまし合い、他者の考え方や感じ方の小さな差異に敏感に反応し、他者が投げかけてくる言葉やメッセージに細やかに応答⁷⁷できるような教室こそが、自己変容の経験の場所としての教室に相応しい。

参考までに強固に制度化された学校教育のなかで、教育的コミュニケーションを無自覚に、それゆえより執拗なかたちで歪ませてきた特異な学校言語のあり方にもここで触れておこう。

学校では、じぶんの知っていることを他人に訊くということが、まるであたりまえのこのように教師から生徒にむけてなされる。・・・試された生徒のほうは「訊かれた」ことに応えるのではなく、当たるか当たらないかというかたちで答えを意識する。・・・両者のあいだには、知りたい、伝えたいという、やみがたい気持ちはない。伝える／応えるというひととひととの関係が、験す／当てるという（「信頼」をいったん停止した）関係にすりかえられてしまっている（鷲田清一）⁷⁸。

相互の信頼に基づいた知りたい、学びたい、教えてほしいという、他者への切なる要求や懇願を抜きにした験す／当てるというコミュニケーションのあり方は、いわばテレビのクイズ番組の解答に一喜一憂するような感性をも共有していよう。今日、学校の授業に対して過剰なまでに求められている楽しさ・面白さ・わかりやすさも、その延長線上にあるのかもしれない。それは日常の情報伝達の様式としてはごく一般的なことではあるが、人間形成に対してある特異な歪んだ効果を及ぼしてきた。学校知として矮小化されてしまう知の形態に絡めとられないで、そこから抜け出せることは、実際上たしかに困難ではあろう。ここで教師はもう、じぶんが知っていることを生徒には訊かないとして、意図的にこうした伝統的な学校言語の使用によるコミュニケーションの歪みを是正する試みも必要であろう。

理屈ではよくわかるのだが、^{あたま}どうも^{断に落ちない}納得できないという、しばしば経験される事態を、竹内は「教育にとって克服せねばならない最大の障害の一つ」として指摘する。竹内にとっては、「ことばの意味を聞き分けるっていうこ

とと、話しかけられているって感じることは全然別」⁷⁹なものである。実はここに、メディアあるいはコミュニケーションがもっとも問題とすべき論点が現れているように思える。佐藤が指摘するように、教室内で言葉の表現力を育てるには、過剰に発言することを強要するよりも、むしろそれ以前に慎み深く聴くことの姿勢の尊重がより意義をもってくる。

発話に込められた言葉にならない話者の思いやその言葉の意味の曖昧さや奥行きというものを「わかる」ことなしに、言葉がとどいたという感じを抱くことは不可能だろう。「あなたの言っていることって、こういうことでしょ」という返答を聞いて、言葉が通じたと思う人がいるだろうか（佐藤学）⁸⁰。

竹内にとって、「声というものは、ほんとに一つの「もの」のように、相手のからだにぶつかったり、はずれたり、散らばったり、落っこちたりするもので、そのありさまは、ほとんど目に見える」⁸¹わけである。そこではほとんど物理的とさえ呼べそうな声の痕跡が見届けられている。

竹内の最初の著書であり、自伝的著作とも呼べる『ことばが^{ひら}劈かれるとき』（思想の科学社）が出版されるのが1975年であり、この著書はその後日本を代表する身体論の先駆的著作として、ほぼ同時期に刊行された市川浩『精神としての身体』（1975年）と並び称されることになる⁸²。

竹内が語ろうとするからだとことばの精妙な身体論に基づく気づきと変容は、演劇の知として林竹二の授業やグループ現代にも共通の語彙を提供しており、三者のあいだで共鳴・交叉している。思うに林竹二がその対談相手として、たびたび竹内敏晴を特に指名していることも、そのことの証左であろう⁸³。「私は竹内敏晴氏との「対談」を望んでいた。・・・授業をして、そこで私の経験したことについて、一緒になってその根底にあるものをさぐり、教えてもらうことのできる人として私は氏以外を考えるとではできなかった」⁸⁴。それは演劇の知と授業の知との邂逅であり、内面的なドラマとして授業を眼差す独自の視点であり、記録映像がその邂逅の現場をフィルム上に定着するのである。



図3-3 「田中正造」舞台稽古中の竹内敏晴
兵庫県立湊川高校（1979年11月）

参考までに、竹内が林竹二の授業のドラマ的あり方について、演出家としての立場から言及した文章を見てみよう。ちょうど林による沖縄訪問授業が開始された1975年5月に教育雑誌に発表された短論文「語り手と対話者—ドラマとしての授業」その他において、竹内はまず林の授業の語り物としての特質を指摘している。また竹内は初めて林の授業「開国」を参観した時点（1975年2月19日）ですでに、その授業の語り物としての構造を直覚していた。

ふと妙なことに気づいていた。それは、林さんの授業には「語り物」としての構造があるな、ということであった。・・・私が感じたのは、聴き手の興味をひきつけ、語りの世界にひきこんでゆくための、まことに見事な導入部を用意しているということなのである。これは「開国」の授業の二時間目になって鮮やかに開花した⁸⁵。

「開国」とは、幕藩体制から明治の近代国家へと移行するなかでの大きな歴史的転換点であった。林は「開国」における深刻な社会的矛盾を説明するのに、講義などでは常套的な「さまざまな事実過程の説明を積み重ねるという方法」をあっさりと捨てている。その代わりに林が授業でとった方略とは、「開国」決断の正に矢面に立たされた老中阿部正弘（1819～57）の政治的苦心のみに集約した語りであった。矛盾の結節点としての人物を通して語り出そうとするその手法は本来文学的な方法であり、伝統的な語り物の系譜に属するものである⁸⁶。

竹内はここで民俗学者の折口信夫を巧みに引きながら「語る」ことについて、それは「うたう」や「うったう」に対比される言葉であるとして、「相手の魂をこちらにかぶさせる、感染させるといふこと」なのだと興味深く注

釈している。つまりカタル（だます）と同様に、それは相手を同じ気持ちに誘い込むことなのだ。林の授業はまさに、語り手の力が聞き手に憑依するような意味での語り物として、ドラマの構造を深く内在させているわけである。ただし授業がドラマの構造を内包しているとはいえ、演劇でのシナリオのように、何か実体としてあるわけではなく、あくまでそれは事後的に確認されるのみである。

語るには相手がある。相手の興味、息づかい、みじろぎ、それらにふれて「語り」は千変し、相手をとらえ、動かしてゆかねばならぬ（竹内敏晴）⁸⁷。

さらに聞き手（子どもたち）に演出者（授業者）の力量が一時的に憑依するだけでは、授業は成立しない。「授業は一〇〇パーセント演技者＝子供の力量が伸びるためではなくはならぬ」。授業が子どもたちが、自分たちだけでは到達できない高みにまで、自分の手や足を使って、よじ登っていくのを助ける仕事として規定されていたことをここでもう一度想起しておこう。演技者の力量が伸長するための必然的な要素、これが授業における対話なのである。

語り手が、語り物のストーリーの展開にドラマを構成するとすれば、対話者は話し相手の急転と発見によってドラマを作り出す⁸⁸。

聞き手に憑依するかのような秀逸な語り物としての構造と、臆見^{ドクサ}を根こそぎにするような対話法との統一。このことが、竹内が林の授業に認めたドラマティズムの本質であった。大学の講義形式の授業を、そのまま小学校の教室に持ち込んだとも度々酷評された林の授業ではあるが、実はそうした批評の多くは、子どもたちの内発的な関心を巧みに触発している林の授業が孕んだドラマ的特性を見逃しているようにも思われる。

撮影前夜

さて沖縄での授業撮影に同行した竹内は、撮影前日（2月7日）の四年二組の授業（授業：231）について述懐している。

最初の日にテストをしました。授業をとにかくやってみる。カメラを据えて、こんな具合でどうか、という具合に。二月で、沖縄ですから、暖かいんですけども、どんな様子になるんだろうかとハラハラして見ていた。私が教室の一番後ろですわって聞いていますと一さっき映画を見ていて、笑っ

ちゃったんですけども、私が映ってるんですね、あの映画は。後ろの壁ぎわにすわって……。林先生の奥さんもいらっしやいます。校長さんの安里さんも並んで⁸⁹。

林の身体の不調（声の不調、言葉のもつれ、不自由な右手、足どりのおぼつかなさ）に直ちに気づいた竹内は、宿泊先のホテルに戻った後、瑞栄夫人立ち合いで、林に「動きと呼吸と声のレッスン」とマッサージを施す。

リハーサルの後、ホテルに戻ってから、私は先生にマッサージをした。肩をもんであげたことは、これまでもあったが、全身にマッサージをしたのはこのときがはじめてである。私は、マッサージをしながら、先生の筋肉の柔らかさに驚いた。それは、鍛えていないゆえの柔らかさではない。非常に弾力があり、柔軟性があった⁹⁰。

林先生は大変からだの柔らかい人ですね。晩年になっても私はびっくりしたことがあるけれども、非常に柔軟な方です。どんどんからだがいきいきと変わってくる⁹¹。

この竹内によるマッサージの逸話は、逸話それ自体としてはささやかなものではあるが、実は林竹二の「精神としての身体」の柔軟なあり様を如実に伝えてくれるものとして大変象徴的であり興味深い。

とにかく、ひょっとするともう一ぺん脳梗塞が起こったらば倒れたまま沖縄から帰れないかもしれないというような不安の中で、あの授業はされた訳ですね。にこにこしてられるけども、かなり気迫のこもったものでありまして、それに私は魅入られるようにしてついていった……。⁹²

2月8日、三年四組での授業映像「記録・授業一人間について」の冒頭には、もはや存在しない久茂地小学校の桃源郷のような校庭風景[図3-1]が映されたあと、教室に向かって廊下をうつむき加減で歩いている林の後姿のショットが大写しにされる[図3-4]。前年暮れに患った脳血栓の後遺症であろうか、右肩が下がって奇妙に傾いており、足をひきずり気味にして歩く様子など、竹内が伝えているような当時の林の身体の状態が推し測られるショットである。映像では多くの参観者、機材を準備する撮影スタッフらと一緒に、竹内敏晴、安里盛市校長、瑞栄夫人らの顔が教室の背後に確認できる。ただし教室に一旦入ると、林は子どもたちに実に軟らかいやさしい

声で「おはよう」と声をかける。これが授業の始まりである。



図3-4 背中の中のショット【林竹二の授業1】



図3-5【林竹二の授業1】



図3-6【林竹二の授業1】

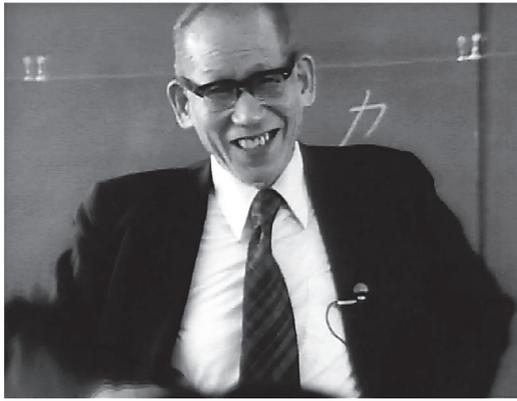


図3-7 『林竹二の授業2』



図3-8 『林竹二の授業2』

本稿はあくまで映像としての林竹二の授業を考察するものであり、この範囲で竹内との関連においてもう少し触れておきたい。林は竹内とのある対談のなかで、小野カメラマンによる写真のなかの子どもたちの表情について興味深い述懐をしている。

林： 写真を見てまして、何だかこう、ひとつのかなしみみたいなものが出てくる感じのものがありますね。

竹内： かなしみ・・・？

林： 日常生活の中では、自分を素直にそのまま出していない。いろいろ演技みたいなものが多いわけですね。

竹内： はい

林： そこから離れる時に、その次元から別の次元に入っていく場合に、かなしみ、一種のかなしみみたいなものが出てくるんじゃないかって気が、写真をたくさん見ていてするんですがね⁹³。

林が指摘しているような「かなしみ」の由来するところについて、竹内は自力ではかなわない「ペルソナをはずす」ということに連関づけて応答している。

竹内： ^{ペルソナ}それがはずされるというか、消えるというか、そういう瞬間というのは、いわば自分と別れなければならない時で、そこにはかなしみというか、そういうことが生まれるんでしょうか。

竹内の演劇の知をここでもう少し援用させてもらうならば、仮の生きるすがたであるペルソナは一旦脱ぎ去ったからといって、人はそのまま真の生きるすがたに帰帰できるわけではない。そこにあるのは、ただより真らしく見える別のペルソナであろうか。演劇的には仮のすがた（役）が、他者のために虚構的に演じられる演技（役に生きる）としてではなく、よりリアルに生きることとしての演技（役を生きる）に変換される瞬間であろうか。

林は子どもたちが、ある次元から離脱して別の次元に入っていく瞬間、それを「かなしみ」と呼んでいた。それは竹内の言葉を借用すれば「言葉になったものを遥かに超えた、あるいは当人の言語化する力を越えた深みに渦まいているもの」が直覚される瞬間であり、竹内はそれを「深い海のなかに潜っていくようなからだ」⁹⁴とも比喩的に表現している。子どもたちの身体上に表象されるイメージをめぐって、竹内の演劇の知は、「映像のなかの授業 映像としての授業」の謎を解き明かす上で、貴重な鍵を提供している。

第四章 撮影者の視点—グループ現代

四宮鉄男の論考

グループ現代「映像と教育を考える会」の四宮鉄男が書き残した論考「授業をいかに映像化するか—『記録・授業一人間について』を制作して—」（『現代教育科学』1977年7月）は、林竹二の授業の映像化の分析を課題とする本稿にとって、映画製作者ならではの大変貴重な情報を提供してくれるのと同時に、授業の映像化の本質について、根本的洞察を孕んだ文書でもある。沖縄での最初の映画撮影後、間もなくして教育学雑誌に発表されたその論考は、教師や教育学者たちが施す通常の授業解釈とは明らかに一線を画しており、その考察の深さや直覚的な眼差しは、映像同様きわめて鋭い。それは安里盛市校長が林の授業に接して直覚した授業の内観法的洞察とも、深く共鳴し合うような授業の内在的理解に基づく撮影技法の発想である。

四宮鉄男は1940年、福岡市に生まれる。早稲田大学第一文学部を卒業後、講談社に勤務（編集者）の後、映画

作家・土本典昭に師事しながら、土本の『留学生チュア・スイ・リン』（自主製作映画 1965 年）等では演出助手を務める。岩波映画では『カラーの眼—光学ガラスからフジカまで—』（企業 PR 映画 1969 年）を初演出するなど、ディレクターとして活動。その後、記録映画を自主製作する記録映画製作者の集団グループ現代で、主題として健康・食品・安全、民俗・民族学そして社会教育映画・学校教材映画の三本柱を掲げながら映画製作を行ってきた。

この三つ目の柱である教育映画に対して、当時四宮は大きな不満を抱く。

これまでの教育と映像のかかわり方に、わたしにはある不満があった。それは、映像が教育の手段としてしか利用されてこなかったということである。映像と教育のかかわりを考えるときにすぐに思い浮かぶ言葉が、「視聴覚教育」という言葉である。逆にいえば、映像は視聴覚教育という枠の中でしかその利用は考えられてこなかったのである。

いわゆる「教育映画」の制作活動は盛んでも、言葉の本来の意味での教育映画はこの世にほとんど存在してこなかったのである。カッコづきの「教育映画」の枠をこえて、映像と教育の新しい関わりを持ってないだろうか。映像の本質的な力はもっと教育のいろんな場面で有効に生かすことができないだろうか⁹⁵。

映像と教育を考える会

この「言葉の本来の意味での教育映画」の制作を目標に、グループ現代のなかで新たに「映像と教育を考える会」が立ち上げられる。メンバーは四宮（監督）の他に、代表の小泉修吉（制作・企画・構成）、惚川修（脚本）、三木実の三名を加えた四名で発足している。

当初、四宮が制作の念頭に置いていたのは、（一）おもしろい学校教材映画を作ること、（二）教育の現場にカメラを持ちこみ、映像による報告書を作ること、（三）授業そのものの記録を撮ること、以上の三点であった⁹⁶。とりわけ三番目の願いである授業そのものの映画の制作、すなわち単に教師が主役となる映画でもなく、また子どもたちの映画でもなく、あくまで授業それ自体が主題とされるような映画、授業そのものにカメラを向けた映画の制作が、まさにグループ現代が自らに課した最大の課題となるのである。

四宮はまた授業の映画をつくる仕事は、「映像の機能の根本に立ちかえり、そこから教育そのものと向きあおう

とする仕事」であると規定し、一回限りの撮影が一回限りの授業と出会うことに、授業を丸ごと撮ろうという教育の映像化の新たな可能性を予感している⁹⁷。

四宮と林竹二との最初の接点は、四宮が林の著作『授業・人間について』（国土社、1973 年）を偶々神田の書店で手にしたことに始まる。メンバーの小泉修吉の述懐（2012 年 5 月）を聞こう。

ある日、岩波映画にいた四宮鉄男が、林竹二の『授業・人間について』という著書を持ってきて、これを映画にしたいというんですね。いま流行の対話型や参加型の教育論とは違い、林さんの授業は子どもにきちっとした論理や理性で教えるところが独創的に思えました⁹⁸。

グループ現代のスタッフが林の授業に実際に参加するのは、年譜資料によれば山形県寒河江市醍醐小学校五年菊地学級での授業（1976 年 6 月 23 日）が最初である⁹⁹。林の授業巡礼の旅に同行し始めたグループ現代のメンバーに対して、林はとにかく授業を勉強してみることを薦めている。

彼らは、私の「人間について」の授業の記録映画をつくらせてもらいたいと前々から私に申し入れてきていたのですが、私は諾否を保留したまま「とにかく授業を勉強してみる」ことをすすめていた。この授業がグループ現代のスタッフが見た最初の私の授業だったのです¹⁰⁰。

林が映画化への「回答を留保している数ヶ月の間にグループ現代のスタッフたちは、『授業・人間について』をテキストにして全員で猛烈に授業の勉強をした。私の書いたものを片はしから読破し、さらに私が授業をすると、どんな遠いところにも全員揃って参観にきた」¹⁰¹。映画化にけるグループ現代の熱量が押し量られるような記述である。

さらに林は授業の映像化について、慎重に念を押している。

授業を参観して外から観察するのはやめてほしい。私と子どもたちの授業に参加して子どもたちと一緒に授業を受けてほしい。その体験の中から授業とは何かを考えてほしい。それができるのなら、撮影してもらってもよい¹⁰²。

もともと四宮には個人的に自身の「息子と娘に、林先生の授業を受けさせたいという思い」が当初から強くあったようで¹⁰³、さらには授業参観などで教師の実際の授業に期待を無残に裏切られる多くの父兄にも映像を見てもらうことが念頭にあった¹⁰⁴。そのため後でも触れるが、外部から分析的（あるいは外在的）に授業を撮ろうとする、授業の表面だけをなぞるような撮影姿勢は、忌避されることになる。

グループ現代
彼らには、授業を外から見ると、全くなかった。いわばすっぽりと授業の中にはいて、子どもと一緒に授業に参加していた。彼らの子どもを見る目のあたたかさや深さも私を感動させた（林竹二）¹⁰⁵。

グループ現代からの授業の映画化の企画の申し出は、1976年4月であったと、林の安里盛市宛の書簡（1976年7月16日）に記述されている。四宮はその間の経緯について、当初林本人は映画化の企画にあまり乗り気ではなかった、とも記している。それは（授業者である）「わたしが主役になるような映画」や「特定の子どものスターになるような映画」ではなく、あくまで「授業が主役となるような映画」（ただし模範授業としてではなく）でなければならなかったのである。そうした思慮が林に授業の映像化を躊躇させていたのである。

映画化の企画の申し出から、映画化の承諾（1976年9月）までの五か月間、林はグループ現代への回答を留保して、自らの授業の映画化について熟考を重ねている。この間の経緯について、もう少し追ってみよう。ここで林を最も躊躇させたのは、前述のように「果たして授業そのものが主役である如き映画をつくることは可能であろうか」¹⁰⁶という根本的な疑念であった。

授業者が授業の主役になれば、それは授業としては失敗だし、また何人かの子どもが主役になってしまっても、これまた授業の映画とはいえない。・・・授業とは一体何なのか、授業の中の子どもにどのような事態が生ずるのかを、直接授業を見たり、感想を読んで知る以上に、明確に教えてくれるものになるのであれば、映画をつくる理由はない¹⁰⁷。

こうした疑念に加えて、さらにもう一つの懸念が林にはあった。林には、全国に及ぶその授業巡礼の旅に随行していたカメラマン小野成視が写し撮った数々の写真が念頭にあったのである。小野の写真は、授業の流れを瞬間的に切りとり・拡大し・静止させて、子どもの一瞬の

表情を逃さず決定的に写し撮るものである。見るものを揺さぶるようなそれら写真の激しい訴求力（「言葉にならないはげしい重いもの」¹⁰⁸）は、たしかに林を驚愕させた。はたしてそのような訴求力は、授業の流れ（映像）のなかで、もたらされるだろうか。

授業の映像化へのこうした逡巡を決定的に覆したのは、実は映画が音をもっているという意味の大きさであったと林は記している。

声をもっていることの重要性は、授業者や子どもたちの声によって授業の展開を知ることが出来るという以上に、無言で授業に参加している子どもの内部に、授業がどれほどつよい事件をひきおこすものかを、映画は語ってくれるかもしれないと思うようになった。私は映画をとってもらおうと決心した¹⁰⁹。

映画には映像とともに、音声が付いているということ。無言で授業に参加している子どもへの眼差しが、映画における「声」という基本的な事実に戻って着目させたことは興味深い。無言のうちにも、子どもたちの内部に深く授業経験が浸透していく様子を注視しようとしている林ならではの見解かと思われる。こうして沖縄で、林の232回目と233回目の授業が撮影されることになる。

かつての林の私塾如月会の元塾生に宛てたある書簡では、直前に敢行されたグループ現代による記録映画の撮影について次のように触れられている。

沖縄で、私の二つの授業を、『グループ現代』が、記録映画にとりました。四台の撮影機を教室にもちこみ、十四、五人のスタッフにかこまれた授業（三年と五年）でしたが、子どもたちは完全にカメラを無視して、授業に集中してくれました。この映画が授業を根本から考えなおすキッカケになってほしいと考えて、『グループ現代』の根気よい要請を受け入れました（伊従正敏宛書簡、1977年3月3日付け）¹¹⁰。

撮影の状況

遂に授業の映像化をグループ現代に許諾した旨を、林は安里校長宛の書簡（1976年9月27日付け）で報じている。「もし撮るんだったら沖縄でやりたいね」という林の言葉を頼りに、グループ現代による沖縄での授業撮影が始まった。

なるほどグループ現代の当初からの撮影構想には、あくまで授業が主役となる教育映画を撮影しようとする企図が含まれている。その際四宮が述べているように、「授

業の映像化とは、授業の空間と時間を、一枚のスクリーンの中にとりこんでいく作業¹¹¹であるならば、それはいきおい授業の初めから終わりまで「その時間と空間のすべてをまるごと撮ろう」¹¹²とする着想にも到るであろう。四宮の言を借りると、それは「四〇分の授業を、時間も空間もそのままに、丸ごとスッポリとフィルムにおさめ」ようとする「ボンと撮る映像」¹¹³なるものとなる。

しかしたとえ数十台のカメラを駆使した厳密な同時録音撮影によっても、教室の空間を、そのまま、ひとつのスクリーンに閉じこめる¹¹⁴ことはやはり夢にすぎない。現実には、ただ四角い小さなスクリーンが一枚あるだけである。

四宮がここで想到するのが、授業の「構造を内包する」映像ということである。つまり授業を構造的に捉えるためには、何台ものカメラを撮りっぱなしの状態にして、同時録音撮影する必要が必ずしもあるわけではない。それはやはり授業の構造を外部から静的にしか捉えない発想に止まろう。授業の「構造を内包する」とは、ただ授業全体を外から丸ごと撮影することで出来るわけではない。

当初、四宮は林の授業を構造的に捉えるために、ある図式的な撮影構想を抱いていたようだ。それは授業全体を、(一) 授業の内容 ⇒ (二) 林の語り口=問題の投げかけ ⇒ (三) 子どもの集中=内面での体験 ⇒ (四) 問答=ドクサの吟味という「四つの要素を、授業の流れの中で、瞬間瞬間の最も確かな映像として選択し積み重ねて」¹¹⁵いくという、いわば合理的で手堅い撮影技法である。あるいは分析的とも言える授業の観方である。従ってカメラの役割も当初は、「Aのカメラは子どもたちのアップ、Bのカメラは林先生と子どもたちのやりとり、Cのカメラは林先生の正面のアップ、Dのカメラは教室の全景とグループショット」¹¹⁶といった具合に、授業の構成場面にそれぞれ対応するかたちで割り振りされていた。ただしこうした撮影構想に従って、仮に授業が撮影されたとしたら、その映像は恐らく平凡な授業映画のひとつに墮していたかもしれない。授業の一回性と撮影の一回性とが邂逅し、授業の本質が露わになる緊迫した状況は、そうした分析的手法では決して写せない。

これじゃ林先生の授業は撮れないぞということに気づかされた。林先生の授業はわたしたちの手におえるしるものではなかった。私は従来の映画技法をきっぱりと捨ててしまおうと思った。映像の一回性という、映像の原点に賭けてみようと思ったのである¹¹⁷。

先にも触れておいたが、林の授業は構造的にドラマ的性格を深く内包しているものであった。ただしそのドラマ性の構造とは、演劇でのシナリオのような、何ら実体的なものでは決してない。あくまでそれは事後的に、結果として確認できるようなものである。四宮が撮影当初、念頭においていた撮影構想は、授業の構造を外在的・分析的に、〈内容／問いかけ〉—〈集中／体験〉—〈問答／吟味〉という形式から捉えようとするものであった。同時に撮影ショットの配列も、子どものアップ⇒やりとり⇒教師のアップ⇒グループショットといったように、各授業シーンに合理的に割り振りされた、至極常識的なものであった。

しかしそうした論理的なアプローチでは、どうしても授業の言説（教育言説）に表面上平仄をおのずと合わせてしまう映像が出来上がってしまうだろう。それでは授業の生命的核心はつかめない。映像と言説とのあいだに生じる捻じれ・齟齬・疎隔を極力排して、そこに間隙のない映像経験を忠実に写し取ること。それが従来までの撮影技法を、あえてきっぱりと捨ててしまおうとした四宮たちの決断の意味である。それは、丸ごとの授業を提示するための新たな方法論への賭けでもある。編集段階でも、授業の内容について一言の解説めいたものさえ挿入されなかったことの意味も、おのずから分かるであろう。

授業を構造的に捉えるということは授業を分析的に撮ることとは大いに異なる。分析的に撮ろうとする映像は、どうしても授業を外側から撮ってしまう。カメラと被写体の関係が固定的となってしまう。一方的に撮る行為は、盗る関係となってしまう。わたしたちは基本的に、**写す=移す**関係をもたねばならないのである¹¹⁸。

「撮る=盗る」関係ではなく、この「写す=移す」関係という言葉のうちに、グループ現代の撮影姿勢が集約されている。ここで授業を「写す/映す」とは、撮影の行為が外在的に「撮る/盗る」ことに墮してしまわないように、対象である授業の本質や子どもたちの変容の核心を、撮影する側で内在化していきながら「**写す(映す)=移す**」関係にあるものと理解される。それは撮影者の「作家としての主体性を無にして対象の存在そのものを自分の中に内在化してゆく作業」であり、あるいは「撮るものと撮られるものが共同して行う記録作業」¹¹⁹に他ならない。

かつて羽仁進監督の『教室の子供たち』の撮影で、見慣れない撮影スタッフや映像機材が堂々と教室内に闖入してきても、子どもたちはたちまちそれらに無頓着に振

舞った。ここ久茂地でも「異形の男たちが、異様な機械を持ちこみ、奇妙な格好で仕事をする」のを尻目に、子どもたちはたちまち授業に集中し沈潜する。隠しカメラの発想は、そもそも必要なかったのである。撮影スタッフは教室という「日常性の世界にカメラという暴力装置をもって侵入する異邦人」であるには違いない。ただしここで問題の鍵は、「カメラがつくりだした非日常性をいかにしてカメラが存在する日常性に回復するか」¹²⁰にかかっている。

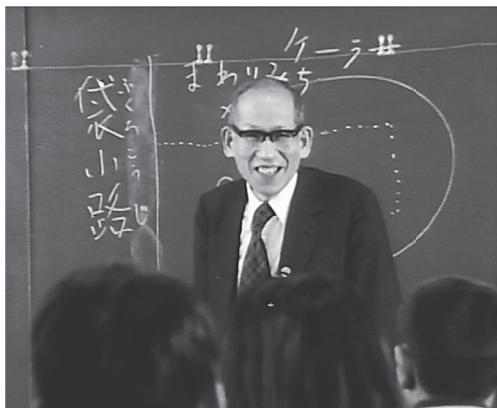


図4-1 『林竹二の授業2』

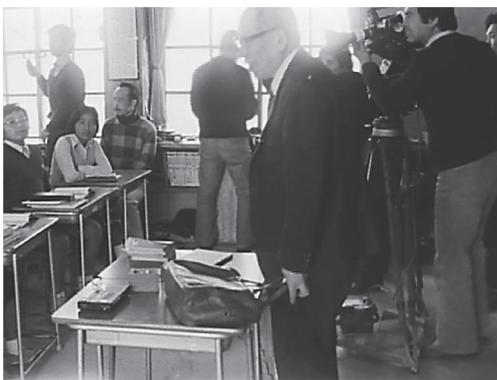


図4-2 『林竹二の授業3 開国』

撮影が被写体とのあいだにもたらすこの「写す=移す」関係は、映像の一回性と表裏一体の関係にある。それは外在的に（授業の外部から）行なう操作的な事柄ではなく、授業の核心部にいきなり入り込んで、自ら体験するしか他に感得の仕方のない内観的な撮影手法なのだ。

結局わたしたちは〈授業へ参加する〉という基本を確認する以外に、いっさいの打ち合わせなしに授業へのぞんだ。授業を撮ろうとする意識を捨てて、授業の中で感じたもの—自分のからだで感応したものだけをフィルムに定着するようにとカメラマンにたのんだ。最も主観的な映像こそ、最も忠実な記録になると確信していたからである（四宮鉄男）¹²¹。

映像を評する凡百の言葉より、こうした述懐のうちに、グループ現代による授業映像の秘密（映像の二重構造）が率直に語られている。カメラは授業の記録者でありながら、同時に授業を直に体験する子ども自身でもある¹²²。教室の子どもたちに語りかけてくる林の映像は、同時に撮影スタッフの一人ひとりにも直に語りかけている。その二重構造の同時性の瞬間をフィルム上に定着しようとするのが、映像の一回性に賭ける、という意味である。

授業「開国」の記録映画の撮影時の子どもたちの感想にも「林先生がみんなに話しかけるときの、なんだか自分一人に話かけているみたいでした。みんなと授業を受けているときも、何だかまわりがなくて私一人のような気がしました」とある¹²³。子どもが授業に集中していくなかで周辺が消えてしまい、自分一人だけが授業を受けているという実感は、しばしば林の授業で記録されていることがらでもある。撮影スタッフにもこうした経験は、如実に経験されている。

この授業の記録映画は、撮影スタッフ自身の授業体験そのものでもあった。授業の動きを皮膚感覚で直に体験しながら、それを刻一刻撮影していくという至難の作業にカメラマンたちは耐えている。そこでは授業が丸ごと、すなわち授業の内実と教室の空気が一緒に、如実に捉えられている。それが体験しながら撮影することの意味であった。

ところで撮影のためには、四人のカメラマンが各自、四台のカメラを回す同時録音撮影方式で臨まれた。小泉の証言を聞いてみよう。

当時は同時録音で、四〇〇フィートマガジンにフィルム一本を装填すれば一〇分回せました。フィルム交換には三分かかります。ですから、四台のカメラが必ず回るように時間差をつけました¹²⁴。

四台のカメラの位置は決めてあるけれども、カメラマンには、「授業に参加しながら、その時々撮りたいものを撮ってくれ」といいました。そして、いったんシャッターを入れたら止めないで一〇分間フィルムを回しきってほしいという条件をつけました。子どもたちのよい表情を狙うのではなく、**授業に参加したカメラマンの体験を映像化してもらった**のです¹²⁵。

フィルムのカメラマンというのは、決められた一定の尺のなかで決定的瞬間を撮ろうとするものです。しかし、ドラマティックなものはいくらでもあるでしょうが、果たして本当にシャッターチャンスなどというものがあるのかという疑いが僕にはあり

ました¹²⁶。

それは「決定的瞬間」に狙いを定めるのではなく、「カメラマンの撮したものの、その撮す一刻の間に、彼のなかで精神と感性をこめて凝視した」もののなかに、「カメラマンの生理と意識の糸がどう織られ」、焼きつけられているかを探りあてる作業となる¹²⁷。

このようにして撮影された映像フィルムは、極力意図的な編集作業を避けて、ただくり返し見るたびに新しい発見のある映画¹²⁸を念頭に仕上げられていく。この授業映画は単なる視聴覚教材として実用的に消費されるものではなく、幾度もの視聴にも耐えうるような、別言すればその都度新たな発見が見いだされ、消費され尽くされないような生命を孕んでいる。繰り返しになるが、この映画は撮影スタッフ全員の授業の体験そのものであった。それだけに「そこから何を讀みとるかは、観客のまったくの自由だった。逆に言えば、観客の力量を問うような映画」¹²⁹でもあったのである。

ただしこの授業映画の上映の状況については、多少の説明を要するであろう。

映画の上映

授業映画「記録・授業一人間について」（三年四組／五年二組）は、当初「四面のスクリーンに四台の映写機で映像と音声と同時に写しだす四面マルチ作品」として上映されたようだ。すなわち四台のカメラで初めから終わりまで丸ごと撮影した林の授業を、編集を加えることなく、そのまま四つのスクリーン上に映し出して「観客にも教室の時間と空間をまるごと体験」してもらうという配慮からであった¹³⁰。

四台のカメラで撮影し、録音したものを丸ごと編集しないでつなぎ、一台のカメラあたりに一本ずつ、映画フィルムを四本つくりました。それらを同期させて、四台の映写機を使い四面マルチスクリーンで上映するという形態でやりました。そうすると、「映画を見る観客が、その映画が撮られた現場に、見ることによって参加することができるのではないか」という理屈です（小泉修吉）¹³¹。

この四面マルチスクリーンによる上映に関して、小泉は興味深い説明をしている。人間にはそもそも限界があるので、四面の映像スクリーンのうち、どうしても一部分を選択的に見ざるをえない。つまり観客は四面の映像を交互に見やりながら、図らずも「自ら見る行為のなか

で編集をする」わけである。この意図せざる編集（選択）行為が、実は観客に教室の臨場感、映像空間の体験をもたらすことになる。

観客はひとりの生徒として、スクリーンを突きぬけて林先生と直接対話する。観客自身が映像の中の子どもたちと一緒に林先生の授業を受けてしまうのである。逆にいえば、観客は、映像の直接体験の中で林先生と直接対話することによって、はじめて、スクリーンの中の子どもたちの内面世界における出来ごとを知ることができるのである¹³²。

実際、映画を見終わってから、「子どもたちと一緒に授業を受けているみたいだった」と感想を語る人は多かったようだ。

グループ現代はこの授業映画の上映を、林による講演と組み合わせる全国的に行なう計画を立てる。記録によると実際の上映では、経費と重量を勘案して、四面ではなく三面マルチスクリーンでの上映となったようだ。そこで組立式の三面スクリーンが鉄骨で作られ、三台の16ミリ映写機と画面のシンクロシステム、スピーカーとアンプが準備された。それら上映機材一式を中古のライトバンに積み込み、「東京から静岡や名古屋、九州まで行って裏日本をまわって」くる一年間の全国巡回上映が行なわれたのである¹³³。

おわりに

沖縄での授業の最初の映画撮影は、1977年2月8日と9日の両日に行なわれた。その撮影直後、林（と竹内）は沖縄からそのまま空路で直接関西入りし、年来の宿願とも言うべき兵庫県立湊川高校（定時制）での授業実践（2月14日）に邁進することとなる。また八月には「教授学研究の会」第四回夏の公開研究大会の席上（参加者680名）で留別宣言を行ない、長年の研究上の同士でもあった教授学研究の会とも袂を分かっている。

教授学研究の会とも袂を分かつことになった講演「教師にとって実践とは」（1977年8月）では、たとえば「私は授業に関するすべてを子どもたちから教えてもらいましたが、教師からは何一つ教えてもらうことができませんでした」、あるいは「私が授業について語れば語るほど教師たちはその中に、彼らの救いになるものをさがすだけで、目が子どもの方に向かないのです」といった大変激しい口吻（「声の弾丸」とも評された¹³⁴）で、林は教師に対する不信や絶望を繰り返し洩らしている¹³⁵。

その具体的一例が、教育雑誌『総合教育技術』（1975年

5月号)の特集「子供が心を開く授業」に掲載された、林の訪問授業についての小学校教師のコラム記事に対する林の激しい反発に見受けられる。それは千代田区立永田町小学校六年一組(谷口学級)で行なわれた林の訪問授業(「人間について」1974年11月16日)をめぐっての記事である¹³⁶。担任教師によるその記事は「林先生の情熱と謙虚さ」と題して、林の授業の教材の研究の深さと資料収集の徹底を賞賛しながら、儀礼的な筆致で書き起こされている。ただし記事は後半部で、日本画家の竹内栖鳳が「斑猫」を描き上げる際の猫の綿密な観察の逸話を紹介しながら、「お孫さんなり近所の子供なり常に子供の発達とか習性とかを見とどけ、子供の成長過程を理解しながら今後もこのような活動をお続けくださることを切にお願いしたい」と繋げて今日の大学での問題の原因を示唆して終わる文章となっている。

一読すると、たしかに表面的な理解ではあるが、さほど問題視されるほどの内容でもなさそうで、つい読み過ぎてしまうような文章である。ただしこの小学校教師の文章に対して林は「授業に関するかぎりでは、私の話したことがなんにも響いていないということが実によくわかるような文章」¹³⁷として激しく反発しているのである。このことは当日の林の授業を受けた小学生たちの感想と照らし合わせてみれば、よく理解できるだろう。

この前みやぎ県から来た先生が、ぼくたちとじゅぎょうをした。・・・あの先生は、とてもあたたかく言**ば**が通じるのである。じゅぎょうをしている時その先生の明るさがわかってくる(T.K.君)。

最初は、つまらなかつたけど、終わりの方になったら、おもしろくなってきて、話を聞いていた。・・・林先生の話は、いっぽう的に、しゃべっていて、ぜんぜん、意味が、わからなかつた。でも、聞いていたら、おもしろくなった(U.K.君)¹³⁸。

担任教師の文章と比較すれば、これらの小学生たちの朴訥ではあるが、その直観的な文章はある意味で林の授業のエッセンスを見事に言い当てている。授業者である林は「ぼくたちとじゅぎょうをした」のであり、その林の語る「言**ば**が通じ」ている。「授業を受けた」のではなく、教師と子どもたちが共に「じゅぎょうをした」のである。授業とは「本来、教師と生徒とが一つのものごとを共有すること、共有する場を作り出してそこで触れあうこと」(竹内敏晴)¹³⁹でもある。そこで林は「いっぽう的に、しゃべって」おり、最初は「ぜんぜん、意味が、わからなかつた」。しかし授業の終わりには「おもしろくなってきて」、林の言葉は子どもたちにたしかに届き始め

ている。ここには秀逸な語り物としての林の授業の性格が露わになっている。

林は担任教師の言を「子どもと絶えず接触している経験を積んだ教師は、子どものことは十分に知っている。林も、もう少し子どもに馴染んで、その発達や成長過程について勉強してもらいたい」と捉え返す。この担任教師においては、林が提起している「問題の所在さえも全然うけとめてもらえなかつた」と述べる林の文章には、沈鬱な響きがこもっていよう。この痛切な響きが、教授学研究の会との決別宣言ともなる「教師にとって実践とは」の基調をなしているのである。

こうして沖縄での最初の映画撮影の後には、すでに七〇歳を越えた老年の林の授業者としての命運に、新たに大きな分岐点ともなる事態がさしかかってくる。また翌年1978年2月には、沖縄久茂地での次の授業映画の撮影『開国』(六年二組 授業番号257)が予定されている。

関西から仙台に戻った直後、安里校長宛の書簡には、次のように記されている。

お陰様でグループ現代の真摯な願いに答え、今まででなかつた**授業そのものを撮した映画**をつくる作業の第一段階が一先ず終わりました。

六月頃に又、開国の授業をやらせていただく件については、是非、実現したいという気を改めてつよくしております(1977年2月16日)¹⁴⁰。

第一回目の上映は、1977年5月に超満員の全電通ホール(東京)で行なわれた。その後制作された『記録・授業—開国』(1978年)並びに『教育の根底にあるもの』(1984年)など、グループ現代による『授業』の映画は、日本全国で千回以上の上映を実現している。当時の林竹二ブームを窺わせる事例でもあろう。

さて1977年7月16日に予定されていた沖縄での講演会(朝日保育セミナー)を病気のため欠席した代わりとして、急遽なされたこの記録映画の上映に、参会者が1200名もあつたことなど林は喜んでいる¹⁴¹。この頃すでに、林竹二とグループ現代の両者は翌年の久茂地での授業(「開国」)の撮影準備を視野に入れており、計画は着実に進められているのである。



図5 講演記録映画『教育の根底にあるもの』
(東京 1983年11月13日)

ただし映画に対する評価については、実際のところ当初はあまり芳しくなかったのが事実のようである。林の後年の次のような述懐。「グループ現代が作ってくれた私の授業の記録映画（「授業・人間について」「授業・開国」）なんかも、初めの間は惨憺たる評価でした。私の記憶に残っているのは、「いいというから十六人も友達を誘って見にきたが、その友達に本当に申しわけがなくてしょうがない。あんなのは授業とは言えません」という、そういうような批判が多かったわけです。・・・それから上映運動で本当に根気よくあれを上映し続けてくれた。そういう結果として、五、六年前とは全く変わりました。あの記録映画に対する評価もね」¹⁴²。

本稿で扱うのは、授業映画「記録・授業一人間について」までに留めておこう。林の沖縄訪問後には、本人もまるで予期していなかったような、また別の大きな展開が控えていたのである。「湊川の闘い」¹⁴³である。

【林竹二・関連略年譜】

1906 (明治 39) 年 12 月 21 日

栃木県矢板市（現在）に生まれる
父は栃木県視学（地方教育行政官）

1925 (大正 14) 年 18 歳

4 月 仙台の東北学院専門部（兼神学部）入学
当初、神学を志す
在学中、山川丙三郎（英文学教授）から薫陶受ける

1930 (昭和 5) 年

3 月 東北学院卒業

学院附属中学部で、非常勤講師として英語を教える

1931 (昭和 6) 年 24 歳

4 月 東北帝国大学法文学部哲学科 入学
西洋古代中世哲学を専攻（石原謙に師事）

1941 (昭和 16) 年

4 月 宮城県女子専門学校 専任講師

1942 (昭和 17) 年

1 月 「奉安殿欠礼問題」による学生処分に抗議して、宮城県女子専門学校 辞職

1945 (昭和 20) 年

12 月 復員軍人・軍学徒講習会として、私塾「如月会」（～1953年頃）主催

1949 (昭和 24) 年 42 歳

7 月 新制東北大学 第一教養部助教授

1952 (昭和 27) 年

7 月 東北大学教育学部へ転任（教育史講座）
森有礼、新井奥邃、田中正造などの歴史研究に着手

1962 (昭和 37) 年

3 月 「ソクラテスおよびプラトンにおける人間形成の問題」（文学博士）
「抵抗の根—田中正造研究への序章—」（『思想の科学』9月号）

1963 (昭和 38) 年

3 月～9 月 欧米渡航 幕末海外留学生の事蹟研究 パリに哲学者・森有正訪問

1965 (昭和 40) 年

2 月 東北大学教育学部 学部長に選出
4 月 1 日 宮城教育大学 創設（東北大学教育学部教員養成課程からの分離独立）

1969 (昭和 44) 年 62 歳

6 月 16 日 宮城教育大学 第三代学長に選出（東北大学教育学部教授併任）
大学紛争の渦中、大学棟封鎖学生との対話を通して、封鎖学生による自主的な封鎖解除

(無条件)

1970 (昭和 45) 年 63 歳

1月31日 東北大学 最終講義「ソクラテスにおける学問」

3月 東北大学教育学部 定年退官 (名誉教授)

6月 東北大学附属病院 入院

この頃 斎藤喜博を識る

10月22日 初の学外授業「開国」(宮城教育大学附属小学校6年1組)

1971 (昭和 46) 年 64 歳

2月19日 「人間について」初の授業 (福島県郡山市立白岩小学校6年生)

1972 (昭和 47) 年 65 歳

2月 東北大学附属病院 入院 (脳血栓)

5月15日 沖縄 本土復帰

6月16日 宮城教育大学学長 再選

1973 (昭和 48) 年 66 歳

4月 安里盛市 那覇市立久茂地小学校に校長として赴任

4月10日 『授業 人間について』(国土社)刊
竹内敏晴 宮城教育大学に非常勤講師として招聘
約10年ぶりの再会

1974 (昭和 49) 年 67 歳

8月8日 - 9日 「教授学研究の会」第一回夏の公開研究大会 (淡路島)

安里盛市との邂逅

1975 (昭和 50) 年 68 歳

1月13日 千代田区立永田町小学校6年1組 授業「開国」

カメラマン・小野成視 林の授業に初めて参加

2月19日 文部大臣・永井道雄 千代田区立永田町小学校3年2組にて林の授業

(「開国」) 視察

演出家・竹内敏晴 林の授業に初めて参加

5月15 - 17日 初の沖縄訪問授業 (那覇市立久茂地小学校)

5月23日 宮城教育大学附属「授業分析センター」開所記念授業 (附属小学校4年4組)

「人間について」

6月7日 宮城教育大学 学長退官記念講義「田中正造の初心」

6月15日 宮城教育大学 任期満了により学長退任 (2期6年・名誉教授号辞退)

7月17日 ひめゆりの塔事件

7月20日 沖縄国際海洋博覧会 開幕

7月 竹内敏晴『ことばが劈かれるとき』(思想の科学社)刊

1976 (昭和 51) 年 69 歳

2月23 - 26日 沖縄訪問授業 (第2回)

4月 グループ現代から、授業の映画化の打診

6月23日 グループ現代 林の授業に初めて参加 (山形県寒河江市立醍醐小学校5年 菊地学級)

7月16日 安里盛市校長宛書簡 授業の映画化について相談

9月27日 グループ現代に、沖縄での授業撮影の許諾

10月20日 北海道を授業巡礼の途上、帯広から旭川への移動中 脳血栓で倒れる

東北大学附属病院 入院 (12月2日まで)

1977 (昭和 52) 年 70 歳

初旬 四宮鉄男(グループ現代) 岩波映画の試写室で、羽仁進「教室の子供たち」

初めて目にする

2月1 - 9日 沖縄訪問授業 (第3回)

2月8日 3年4組「記録・授業一人間について: ビーバー」映画撮影

2月9日 5年2組「記録・授業一人間について: アマラとカマラ」映画撮影

2月14日 兵庫県立湊川高校2年生 授業「人間について」

5月 記録映画 最初の上映 (全電通ホール・東京)

5月24日 湊川高校 授業「開国」

7月 四宮鉄男「授業をいかに映像化するか」(『現代教育科学』)発表

8月4日 「教授学研究の会」第四回夏の公開研究大会 (片山津)

研究会との留別講演「教師にとって実践とは」

1978 (昭和 53) 年 71 歳

2月2 - 9日 沖縄訪問授業 (第4回)

2月3日 6年2組「開国」映画撮影

5月16 - 6月2日 アメリカ再訪 マカレストラー・カレッジ (ミネソタ州) より「名誉博士号」授与

カメラマン小野成視 随行
12月28日 夫妻で水俣訪問

1979 (昭和54) 年

3月 沖縄訪問 (第5回)
4月1日 安里盛市 久茂地小学校校長 退職

1980 (昭和55) 年

8月 沖縄訪問 (第6回)

1983 (昭和58) 年 76歳

2月 沖縄訪問 (第7回)
4月 沖縄訪問 (第8回・最後の訪問)
11月13日 講演「教育の根底にあるもの」
(東京・原宿)
11月19日 講演「田中正造の最後の戦い」
(栃木県 佐野市郷土博物館・開館記念講演)
※両講演とも、グループ現代により記録映画化

1984 (昭和59) 年

2月7日 最後の授業 (「人間について」定時制
南葛飾高校)
3月23日 自宅にて脳梗塞で倒れる 東北大学
附属病院 入院
11月 一時 病状好転して退院
12月 再入院

1985 (昭和60) 年

4月1日 仙台にて歿 78歳
4月14日 無式による告別式「林竹二先生を送る
会」(追悼講演: 鶴見俊輔 東北大学川内記念講
堂)

註

- 1 林竹二／写真・小野成視『問いつづけて—教育とは何だろうか』径書房、1981年、75頁。
- 2 林は小学校で授業を始めた理由について、率直に次のように述べている。「これが私が小学校でしたはじめての授業であった。動機は簡単であった。私は、いっぺん授業というものをしてみたかった。・・・新しい教育(すなわち教科書「を」でなく、教科書「で」教える仕事)の実際に、みるのではなくやってみることによって、触れてみたいというねがいがあったかもしれない」林竹二「巻末に」『林竹二著作集』第7巻(授業の成立)筑摩書房、369頁。
- 3 『林竹二・授業の中の子どもたち』日本放送出版協会、1976年、「まえがき」参照。
- 4 小野成視『ひかりは たもち 授業を創る—三本木小でおこったこと』評論社、1994年、90頁。
- 5 四宮鉄男(グループ現代『映像と教育を考える会』)「授業をいかに映像化するか—『記録・授業—人間について』を制作して」『現代教育科学』明治図書出版、1977年7月号、86頁。
- 6 「林竹二・授業実施自記録」『思想の科学』No.69、臨時増刊号「林竹二研究のために」1985年11月号、136頁。
- 7 小野成視「専属カメラマンの記」『林竹二・授業の中の子どもたち』170頁。
- 8 同書、170頁。
- 9 当日の授業の様子については、『林竹二・授業の中の子どもたち』所収のグラビア写真及び「授業の記録」に収められている。
- 10 四宮鉄男、前掲書、85頁。
- 11 安里盛市『林竹二・斎藤喜博に学んで』一莖書房、1992年、189頁。
- 12 林竹二「子どもが授業の主体であるということ」『林竹二著作集』第7巻、99-100頁。因みに林竹二自身も、戦後間もない時期(1950年代)に松山・瑞巖寺などの写真撮影に没頭している。自ら写真の現像・引き伸ばしも行なう徹底ぶりであったという。日向康『林竹二・天の仕事』講談社、1986年、320頁参照。
- 13 林竹二『林竹二・授業の中の子どもたち』「あとがき」172頁。
- 14 竹内敏晴編『からだ=魂のドラマ 「生きる力」がめざめるために』藤原書店、2003年、71頁。「もちあわせの知識にたよって正解を出すのと、授業の中で問題にぶつかり、それと取り組んで、一つの事が解けた、あるいは見えてきたという経験とはまるで違うのです」。
- 15 林竹二「教師は何にたいして責任を負っているのか」『林竹二著作集』第7巻、206頁。
- 16 竹内敏晴「語り手と対話者—ドラマとしての授業 子供たちの間に、緊張を生み出したものは何か。それはいかに持続されたか」『総合教育技術』1975年5月号、68頁。
- 17 林竹二『林竹二・授業の中の子どもたち』「あとがき」173頁。
- 18 同書、173頁。
- 19 横須賀薫「林竹二について」林竹二『教えるということ』国土社、1978年、238-240頁。
- 20 たとえば歴史家の萩原延壽は、林の森有礼研究における林竹二を評して「ひとことで言って、林さんは行間を読む人、いや、行間が読める人であった」とも記している。萩原延壽「行間を読む人—林竹二を偲んで—」林竹二著作集第9巻、月報9、一九八七年。
- 21 塙正男『医療ってなんだろう 病院化社会の幻想』青土社、1988年、255頁。
- 22 斎藤喜博・林竹二『対話 子どもの事実—教育の意味—』筑摩書房、1978年、189頁。
- 23 林竹二「教育には作品はあるだろうか」『林竹二著作集』第7巻、364頁。
- 24 林竹二『教えるということ』国土社(国土新書)、1978年、29頁。
- 25 安彦忠彦「本来相対化してとらえるべき参考実践 「林竹二の授業論」をどう考えるか」『現代教育科学』No.299、1981年、92-93頁参照。
- 26 四宮鉄男、前掲書、88頁。
- 27 稲賀繁美『絵画の臨界』名古屋大学出版会、2014年、iv頁。
- 28 永井道雄「林竹二—思想家・教育者として」『総合教育技術』(「特集 林竹二の「授業」—教育に遺したもの」)1985年10

- 月号、24 - 25 頁。
- 29 同書、24 頁。教育学者の上田薫は、かつて永井文部大臣の仲介によって、四谷駅に近い三木（武夫）事務所で行なわれた首相と教育学者たちとの懇談を追想している。「このときがわたくしの林さんにお会いした最後であった。林さんはあいかかわらずお元気で、時間を忘却して熱弁をふるわれた。・・林さんにはときおり我を忘れるというところがあるように思われた。わたくしにはそれが、よい意味での荒けずりとでもいうべきものだったと今も思える」。上田薫「林竹二さんのこと」『林竹二 その思索と行動』国土社、1985 年、15 頁。林竹二の性格の一面を伝える記述であろう。
- 30 『林竹二・教室の中の子どもたち』グラビア参照のこと。
- 31 授業当日の竹内敏晴の述懐。「足音をたてないためにわたしは革靴を脱ぎ白い体操靴にはきかえて、そっと教室の戸を開けた。壁ぎわには大勢の人が詰めていて、新聞記者らしくメモを片手にじろりと見返る人もある。窓際に背筋を伸ばして端座しているのが永井道雄文部大臣なのだろう。子どもたちはしんとして、しかし時々横をのぞいてみたりしている。やがて少し背を丸めて一人のお年寄りが入ってきて教壇に立つとにっこりとした。抱えてきた画板のようなものから大きな写真を取り出して高く掲げた。「これはなんかわかるかな？」ひとりひとりに問いかけてゆく。話しがすすむにつれて子どもたちは眉をよせたり、ニコニコしたり、急に唇をかんでしんとしてしまったりする。そのとつとつとした語り口に、巧みなというより考え抜いて組み立てられた構造があった。それはドラマの導入部を思わせる周到な布置に思えた。これが、わたしの、林竹二の授業に立ち会った始めだった」。竹内敏晴編『からだ=魂のドラマ』8 頁。
- 32 授業記録の番号は、林竹二自身によって付けられた授業の実践順を示す番号である。『林竹二著作集』第 10 巻（生きること学ぶこと）筑摩書房、1987 年、「年譜」資料参照。
- 33 林竹二『林竹二・教室の中の子どもたち』グラビア参照のこと。
- 34 1970 年代の教育思潮の一つとして、「教育工学」の流行がある。たとえば学校教育現場に視聴覚教育を普及させ、コンピューターを導入する試みである。ただし宮城教育大学では、林学長の肝いりで教育工学の思潮とは一線を画した構想による「授業分析センター」が開設されている。センターは全国各地の小中学校からすぐれた授業実践の記録を収集し、それに基づいて教授学の研究を進めるために開設された。専任教授としては斎藤喜博が迎えられている。大泉浩一『教育の冒険 林竹二と宮城教育大学の 1970 年代』メディアデザイン（仙台文庫）、2013 年参照。
- 35 学長退任にあたり林は、大学からの名誉教授の称号を辞退する。「私は六年間教員養成大学の学長をしてきたわけですが、結局、何もやれなかった、否、やらなかった、というのがこのごろの私の実感です」。林竹二・灰谷健次郎『教えることと学ぶこと』倫書房、1996 年、57 頁。林は大学紛争の渦中において全国的な注目を集める様々な大学改革を断行している。ただし大学での教員養成についての自責の念はその後も深まり、それは自身の過去との決別というかたちを取る。
- 36 1975 年 5 月 23 日の宮城教育大学附属「授業分析センター」開所式での記念授業「人間について（ビーバー）」は、その映像記録が DVD2 巻（前方カメラ映像と後方カメラ映像）として、宮城教育大学附属図書館に収められている。
- 37 林竹二『林竹二・授業の中の子どもたち』松本陽一「まえがき」。
- 38 沖縄での最初の映画撮影が行なわれた 1977 年の夏には、兵庫解放教育研究大会（ルナ・ホール）において全国から参集した 1200 名の教師たちを前にして、公開授業がなされている。林竹二『学ぶこと変わること 写真集・教育の再生をもとめて』筑摩書房、1978 年、iv 頁。
- 39 安里盛市、前掲書、150 頁。
- 40 同書、150 頁。
- 41 同書、178 頁。これらの訪問授業は「旅費一切自弁で、謝礼もご辞退なさるという無償の行為」であった。同書、150 頁。林の安里盛市宛書簡にも「宿泊費等、この前はぜひ分御心配をかけてしまいましたが、旅費は勿論、滞在費も当方で持つことにします。久茂地小の応援にゆくのですから、そちらの重荷になるのでは、何にもなりません」と記されている。同書、188 頁。
- 42 安里盛市宛の林の書簡（1975 年 5 月 21 日付け）。同書、179 頁。
- 43 林竹二「久茂地の子どもたち」『林竹二著作集』第 8 巻（運命としての学校）1983 年、58 頁。
- 44 狩野浩二「授業研究を核とする学校づくりに関する実証的研究—泡瀬幼稚園・小学校（沖縄）の教育実践を中心に—」『十文字学園女子大学紀要』vol.46、2015 年参照。
Jumonji-u.repo.nii.ac.jp (2021.0328.)
- 45 林竹二「久茂地の子どもたち」『林竹二著作集』第 8 巻、60 - 61 頁。
- 46 安里盛市、前掲書、208 頁。
- 47 山住正巳『日本教育小史—近・現代—』岩波書店（岩波新書）、1987 年、239 頁。
- 48 本土復帰後の沖縄での教育問題としては、(一) 教育委員会の任命制、(二) 劣悪な教育施設・設備、(三) 教育内容の問題が挙げられている。同書、239 - 240 頁参照。
- 49 川口俊明『全国学力テストはなぜ失敗したのか—学力調査を科学する』岩波書店、2020 年、6、26 頁。
- 50 同書、209 - 210 頁。及び安里盛市「沖縄で投げかけ、残したの」国土社編『林竹二 その思索と行動』国土社、1985 年、195 - 196 頁参照。
- 51 宮武実知子「沖縄文化」筒井清忠編『昭和史講義【戦後文化篇】(上)』筑摩書房、2022 年、294 頁。宮武は「琉球文化・建築物・民藝・方言など、現在「価値がある」とされる文化はいずれも、大正から昭和にかけて日本の文化人が「発見」したものだ」との興味深い指摘をしている。
- 52 安里盛市、前掲書、195 頁。
- 53 哲学者の木田元（1928 ~ 2014）は竹内敏晴との対談のなかで、かつて東北大学哲学研究室の先輩でもあった林竹二の往時について次のように語っている。「林竹二さんは、ある時期から変わりましたね。…とにかくよくしゃべる人ではあったんですが、教育的な情熱とか才能があるなんて思いもしなかった。むしろネチネチネチネチ、理屈が先に立つような感じの人だった。・・・林さんは少し訛っていたでしょう。それにことばが遅かった。しかも、人にしゃべらせないで独りでしゃべりつづけるようなところがありましたから、ちょっと意外な感じがしました」。木田元・竹内敏晴『待つしかないか』春風社、2003 年、130 - 131 頁。
- 54 「私は小・中学校で授業をして一番いやだったのは、私の授業を教師たちが模範授業としかみないことでした。ですからすぐに学べるようなものがないと、あれはだめだと言う。あるいは自分たちのありあわせの物差しで測って、あれはだめだと言う。それが一番いやだった」。竹内敏晴編『からだ=魂のドラマ』159 頁。
- 55 安彦忠彦、前掲書、91 頁。安彦は林竹二の授業について、その特殊な授業の一般化という一線を踏み越えるべきではな

かったこと、その授業に対する多くの教師からの無理解に対して、内在的に批評しようとしなかったことなど、その一側面を鋭く突いている。

- 56 安里盛市「教師として、人間として学ぶもの」『思想の科学』No.69、1985年11月臨時増刊号、103 - 104頁。
- 57 安里盛市『林竹二・斎藤喜博に学んで』154頁。
- 58 安里盛市「教師として、人間として学ぶもの」104頁。
- 59 同書、104頁。
- 60 安里盛市『林竹二・斎藤喜博に学んで』191 - 192頁。
- 61 同書、194頁。四宮鉄男によるこの文章（「グループ現代記録・授業『開国』」）は、オリジナル文書が未確認のため、安里の著書からの転載による。
- 62 四宮「授業をいかに映像化するか」81頁。
- 63 横須賀薫「林竹二について」林竹二『教えるということ』241頁。
- 64 林竹二・年譜『林竹二著作集』第10巻、264頁。
- 65 かつての林の私塾「如月会」の塾生、伊従正敏宛の書簡（1977年3月3日付け）。『思想の科学』No.69、1985年11月号所収の座談会記録「回想「如月会」時代」20 - 21頁。
- 66 横須賀薫、前掲書、241 - 242頁。
- 67 安里盛市、前掲書、198頁。
- 68 竹内敏晴編『からだ=魂のドラマ』224頁。
- 69 林は戦後東北大学に新設された教育学部（教育史講座）に転じたのち、1955年頃より森有礼、新井奥達、田中正造の研究に着手している。
- 70 竹内敏晴、前掲書、83頁。
- 71 同書、248頁。
- 72 同書、248頁。
- 73 鷺田清一『「聴く」ことの一臨床哲学試論』阪急コミュニケーションズ、1999年、68 - 70頁。
- 74 竹内敏晴「情報以前 聞くことの倫理」『環【歴史・環境・文明】』vol.20、藤原書店、2005年、202 - 203頁。
- 75 鷺田清一、前掲書、70 - 71頁。
- 76 佐藤学『教育改革をデザインする』岩波書店、1999年、106頁。
- 77 同書、109頁。
- 78 鷺田清一、前掲書、267頁。
- 79 竹内敏晴『教師のためのからだとことば考』筑摩書房（ちくま学芸文庫）、2004年、187頁。
- 80 佐藤学『授業を変える 学校が変わる 総合学習からカリキュラムの創造へ』小学館、2000年、48頁。
- 81 竹内敏晴、前掲書、71頁。
- 82 竹内が主張する「からだ」（身体）について、林は竹内との対話のなかでそれを「ローマ人の言うアニマに近い」あるいは「ほとんど魂と同じ」とも指摘している。竹内の精妙な身体論を理解するうえでこの洞察は重要であろう。一九七〇年代当時、現象学関連以外では「からだ・身体」論はそれほど一般には浸透していなかった。因みに同時期を代表する身体論の試みとして市川浩の『精神としての身体・身体としての精神』について竹内は「私には「身」の織りなす用法は、固体としての身体に閉じこめられているようなイメージが拭いきれないのである。他者に対して踏みだしていくおのれをことば化し、他者との人間関係を表わす熟語を私は見つけようとしたが「身」の用法においてはとうとう見つけ切れなかった」とも述べている。竹内敏晴『時満ちくれば—「愛」へと至らんとする15の歩み』筑摩書房、1988年、88 - 89頁。
- 83 林竹二と竹内敏晴との対談で主要なものとしては、「対談 授業の中の子どもと教師—日常性を超えるとき」『林竹二・授業の中の子どもたち』日本放送出版協会、1976年。「対談 学

ぶこと変わること」林竹二『学ぶこと変わること 写真集・教育の再生をもとめて』筑摩書房、1978年。林竹二・竹内敏晴『からだ=魂のドラマ 「生きる力」がめざめるために』藤原書店、2003年などが挙げられる。

- 84 林竹二『学ぶこと変わること 写真集・教育の再生をもとめて』筑摩書房、1978年、121頁。
- 85 竹内敏晴「語り手と対話者—林竹二の授業」『セレクション・竹内敏晴の「からだと思想」3 「出会う」ことと「生きる」こと』藤原書店、2014年、17頁。
- 86 同書、18頁参照。
- 87 竹内敏晴「語り手と対話者—ドラマとしての授業 子供たちの間に、緊張を生み出したものは何か。それはいかに持続されたか」『総合教育技術』30(2)、1975年5月号、67頁。
- 88 同書、68頁。
- 89 竹内敏晴『からだ=魂のドラマ』249頁。
- 90 同書、227 - 228頁。
- 91 同書、250頁。
- 92 同書、251頁。
- 93 同書、180頁。
- 94 同書、222頁。
- 95 四宮鉄男、前掲書、76頁。
- 96 同書、77 - 78頁。
- 97 同書、79頁参照。
- 98 小泉修吉「農村、自然、人間と向き合う」金子遊編『ドキュメンタリー映画術』論創社、2017年、75頁。
- 99 「林竹二・授業実施自記録」『思想の科学』No.69、1985年、138頁参照。
- 100 林竹二「教師には二つの源流がある」『林竹二著作集』第8巻、252頁。この醍醐小学校での授業に初めて参加したグループ現代のスタッフに授業の感想を訊ねた林は、次のような彼らの反応を記している。「授業に深く入って、美しくなった子どもたちの姿に、胸が詰まって何にもいえない。感想をいえなかったって無理です」と。林竹二・灰谷健次郎『教えることと学ぶこと』31頁。
- 101 林竹二『教えるということ』30頁。
- 102 小泉修吉「ドキュメンタリー制作と実際の上映」佐藤忠男編『日本のドキュメンタリー—ドキュメンタリーの魅力』岩波書店、2009年、156 - 157頁。
- 103 安里盛市、前掲書、194頁。
- 104 四宮鉄男、前掲書、79頁。
- 105 林竹二、前掲書、30頁。
- 106 同書、29頁。
- 107 同書、29頁。
- 108 同書、226頁。
- 109 同書、31頁。
- 110 『思想の科学』No.69「林竹二研究のために」1985年11月号所収の座談会記録「回想「如月会」時代」20 - 21頁。
- 111 同書、82頁。
- 112 小泉修吉、前掲書、157頁。
- 113 四宮鉄男、前掲書、82頁。
- 114 同書、82頁。
- 115 同書、83頁。
- 116 同書、84頁。
- 117 同書、84頁。
- 118 同書、84頁。
- 119 小泉修吉「撮ることからはじまる」ドキュメンタリー—『時空を駆ける、フィールドワーク東北学』東北文化研究センター、はる書房、2013年、181頁。
- 120 同書、181頁。

- 121 同書、86頁。
- 122 同書、85頁。
- 123 林竹二『教育亡国』筑摩書房、1983年、137頁。
- 124 小泉修吉「農村、自然、人間と向き合う」『ドキュメンタリー映画術』76頁。
- 125 同書、77頁。因みに四宮鉄男は当時撮影に要したフィルム費用に関して、100フィート（16ミリフィルム）では3分間撮影できるだけであり、現像代を含めた当時の金額で3分間の撮影に1万円かかり、きわめて高価なものであったと回顧している。グループ現代主催オンラインイベント「哲学者であり教育者 林竹二」2020年12月22日配信。https://www.youtube.com/watch?v=
- 126 同書、77頁。
- 127 土本典昭「ドキュメンタリー映画の製作現場における特にカメラマンとの関係について」『不敗のドキュメンタリー 水俣を撮りつづけて』岩波書店、2019年、133 - 134頁。
- 128 四宮鉄男、前掲書、87頁。
- 129 四宮鉄男「映画「記録・授業一人間について」」国土社編集部編『林竹二 その思索と行動』国土社、1985年、224頁。
- 130 小泉修吉「ドキュメンタリー制作と実際の上映」『日本のドキュメンタリー1』157頁。
- 131 小泉修吉「農村、自然、人間と向き合う」『ドキュメンタリー映画術』76頁。
- 132 同書、76頁。
- 133 小泉修吉「ドキュメンタリー制作と実際の上映」『日本のドキュメンタリー1』157頁。
- 134 渡辺金五郎「林先生の悲願、そして留別」林竹二著作集第7巻、月報2、1983年、3頁。
- 135 林竹二「教師にとって実践とは」『林竹二著作集』第7巻、272 - 273頁。
- 136 『総合教育技術』30(2)1975年5月号、53頁参照。
- 137 林竹二「教師にとって実践とは」『林竹二著作集』第7巻、274頁。
- 138 『総合教育技術』30(2)、43頁。
- 139 竹内敏晴、前掲書、68頁。
- 140 安里盛市、前掲書、198頁。ただしこの「開国」の授業の予定は、林の病気のため実現しなかった。
- 141 同書、200頁。
- 142 林竹二『教育の根底にあるもの』径書房、1984年、11 - 12頁。
- 143 林は1976年、兵庫県解放教育研究会から招かれた例会での講演を機縁として、兵庫県立湊川高校（定時制）での授業を行なう。かつて田中正造が足尾鉍毒事件において「谷中入り」したのに倣って、自らの湊川高校での一連の訪問授業を「湊川入り」と呼んだのである。ただし本稿で扱ったのは、林

竹二の授業期間区分で言うなら、第一期（1970年の訪問授業の開始から1975年の初の沖縄行を経て1977年の教授学研究会での留別講演までの時期）におよそ相応する。それ以降、更に激変する第二期・第三期については主題上触れえなかった。林の授業時期区分については、日向康『林竹二・天の仕事』174頁参照。

映像・図版 出典一覧

- 図1-1 日向康『林竹二・天の仕事』講談社、1986年。
- 図1-2 林竹二『林竹二・授業の中の子どもたち』日本放送出版協会、1976年。
- 図1-3 小野具定「冬ざれ」(1980年) 図録『小野具定展：刻まれた記憶』1995年、練馬区立美術館。
- 図2-1 林竹二『学ぶこと変わること 写真集・教育の再生をもとめて』筑摩書房、1978年。
- 図2-2 『総合教育技術』小学館、1985年10月号。
- 図2-3 『林竹二の授業2 アマラとカマラ』グループ現代、1977年。
- 図2-4 林竹二『林竹二・授業の中の子どもたち』
- 図2-5 林竹二『林竹二・授業の中の子どもたち』
- 図3-1 『林竹二の授業1 ビーバー』グループ現代、1977年。
- 図3-2 講演記録映画『田中正造の最後の戦い』栃木県佐野市郷土博物館・開館記念講演（1983年11月19日）、制作：グループ現代、1984年。
- 図3-3 竹内敏晴『セレクション 竹内敏晴の「からだと思想」3「出会う」と「生きる」こと』藤原書店、2014年。
- 図3-4 『林竹二の授業1』
- 図3-5 『林竹二の授業1』
- 図3-6 『林竹二の授業1』
- 図3-7 『林竹二の授業2』
- 図3-8 『林竹二の授業2』
- 図4-1 『林竹二の授業2』
- 図4-2 『林竹二の授業3 開国』グループ現代、1978年。
- 図5 講演記録映画『教育の根底にあるもの—林竹二先生の講演の記録—』（東京 1983年11月13日）、制作：グループ現代、1984年。

※宮城教育大学附属図書館には、林竹二の貴重な授業映像を視聴させていただき、ここに感謝いたします。

※本稿は2022年度・日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究(C)「授業の映像化の論理と構造の解析—映像教育学構築のための試論—」(課題番号20K02457)からの助成を受けた研究成果を含むものです。

